川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年一月二十五日　印刷
昭和四十四年二月一日発行（毎月一日発行）
（第四十一号）

No. 41

雅号ぶっちやけばなし・特集

二月号

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘　西宮酒造　醸

戎橋　大阪

味に輝く　北極星

戎橋　**北極星**　(641) 一二七七・一三六六・一三五五
味堂やわらぎ　(832) 一五九三
結婚式場　やわらぎ殿　北極星五階
曽根崎　北極星北店　(312) 七三八
永楽橋　やわらぎ　(551) 七一六八
野田阪神　別館やわらぎ　(441) 六〇八一
野田阪神　パンヤの食堂　(441) 二四七六

いのちいのち強がりでない屠蘇を酌み

おせち料理規格品の顔で坐し

息切れをあたため元旦の朝の幸

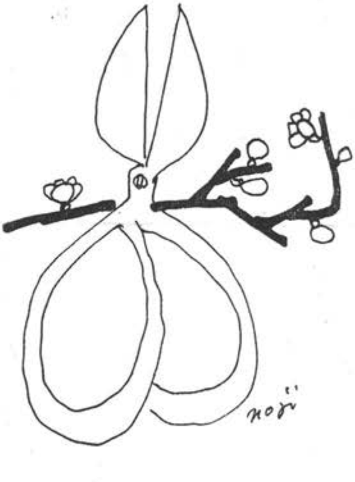
瑞川氏類焼

初夢のさなかに消防車が走り

三太郎氏を悼む

お引きとめ叶わず寒空に一人旅

中島生々庵



今月のことば

歳末も押し迫まる12月21日ふとした機縁で浅草観音に参詣する事が出来た。上野から地下鉄で雷門に出る。いろんな思い出が浮ぶ中で、まず50年程昔、観音様を拝む心より六区の活動写真や、10銭で三館共通。そこを出て5銭の牛めし、これが日曜日毎のキマリであった。その後大阪の大学を出て間もなく学会出席のため上京した折、上野から雷門まで東京で初めて地下鉄が開通したばかりだったが珍らしくてたまらず、同行の友人達と幼稚園の遠足よろしく何べんも往復してはしやいだ記憶が蘇がえる。仲見世の賑いも今日とは違った雰囲気で、それもあながち私の老化のせいばかりでもない。驚いた事には立派な雷門が建っている。雷門とは名ばかりで門など見た事もなかったが昭和35年95年ぶりに復元されたと建札がある。悠々時の流れのささやきがしのび込むように聞こえて来るようだ。これから50年という将来、川柳塔の年輪を思いながら歳末の夕まぐれ観音様に合掌するのであった。

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)
川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)
職人気質……清水白柳…(2)
川傍柳初篇研究…(六十八)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫
川上三太郎氏を悼む……中島生々庵…(22)
へそまがり酒徒行伝…(大陸巷談)……東野大八…(26)
異本柳多留にお答え……岡田甫…(23)
秀句鑑賞……後藤梅志…(30)
川柳徳川記…(二)……冨士野鞍馬…(28)
近作柳樽……西尾栞選…(34)

私論・柳論

職人気質

二月といえばあらゆるものが凍る季節で、その凍ることを待っている職業もあるが左官のような仕事は寒さに弱いものの一つだ。

左官屋は寒波に弱し今日も来ず　白柳

世間でよく言われている言葉に職人芸とか職人気質というのがある。職人芸というのは手際よくものを仕上げてゆくことを言うのだと思っている。そうした職人が作ったものは見かけは奇麗だが、その一つ一つに魂がこもっていないから心に触れるものが少い。川柳についてもそんなことが言えそうな気がする。課題を与えられたらすぐに鉛筆を持って淀みなく作句出来る川柳職人が余りにも多いように思う。難のない句さえ出来ればそれでいいではないかと言われたらその通りで文句の言いようもないが、どうもそれではいけない

―同人特集―

雅号ぶっちゃけばなし……………………(24)
北川春巣・中島生々庵・橋本緑雨・若本多久志・後藤梅志・西尾栞・服部十九平・本田恵二朗・菊沢小松園・浜田久米雄・川村好郎・傍島静馬・大坂形水・伊藤茶仏・八木摩天郎・戸田古方・金井文秋・西田柳宏子・河井庸佑・橘高薫風・清水白柳・不二田一三夫 (順不同)

初歩教室……………………菊沢小松園…(44)

ユーモアを川柳へ……………………福井野迷路…(25)

大萬川柳「人違い」……………………清水白柳選…(48)

★柳界展望……………………(薫風)…(50)

★本社一月句会……………………(庸佑)…(52)

★各地柳壇……………………(文秋)…(56)

「迷信」……………………岡崎祥月選…(46)

一路集「犬」……………………山本素郎選…(46)

「新車」……………………伊藤茶仏選…(47)

★編集後記……………………(一三夫)…(65)

ような気がする。ありきたりの可もなく不可もない句が羅列されているのを見ると、いかに職人芸の達者な柳人が多いかに気がつく。勿論そうした境地に達しない柳人には、せめてあれ位いの句を作りたいと羨望の眼をむけている人もあるとは思うが、ここで考えてほしいことは、魂のこもらない句が百句入選するよりも、精魂こめた一句の入選が作家として喜ぶべきことだということである。

多作するなというのではない。多作するのはその一句を得るためのレッスンなのだから、多く作って多く捨てることを忘れてはいけない。

職人気質は職人芸と違って一途なものを持っている点で同調出来る。その人でなければ出来ない作品、それを生み出すのが職人気質の持っているよいところなのだ。いつか若い人に言ったことがある川柳職人にはなるな。職人気質の(個性のある)作品を生む努力をしてほしい、と。

(清水白柳)

川柳塔

中島生々庵選

岡山市　服部十九平

引潮に宿かりが出て日に当り
保護鳥になって百姓困らせる
右向ケ右ぎっちょの一人左向く
入墨が消えず甦生はかどらず
何思いだしたかびっこの急ぎ足

青森県　工藤甲吉

ふるさとで心きよまるわらべ歌
産んだ子でないかなしさを秘めている
百姓を瑞穂の国が圧しつぶし
貧乏神賽銭ぐらいでは去らず
ほれてからリモート・コントロールされ

岡山県　直原七面山

恋が進まぬ日の日記
甘えておれば二号無事
がめつく生きてこれも人生
医者替えて替えて病気をこじらかせ
意見折り合わずホテルを出る二人

東大阪市　久米奈良子

吹き溜り落葉となりしめぐりあい
山呼べば山は孤独のハーモニー
オルゴール繰り返えすのみ恋果つる
書初めの反古に埋まる十二月
遠まきに噂の中の女の灯

松江市　中川晃男

施設児へクリスマス早く来てしまい
豪快に賞与の何割飲み上げる
出世せぬので残る生字引

話などないが日当り良いベンチ
横切った墓場は団地へ近い道

倉敷市　本田恵二朗

去る陽へ背伸びしている島の影
細道のそぞろ歩きへ島媚びる
ささやかな趣味日溜りへ鉢移す
五体で書くピリオドの無い綴方
体力テスト精神年齢をあざ笑う

大阪市　大坂形水

息抜きの欲しいところへ良い相手
雪国の初版誰かに貸したまま
広告を断り切れぬ弱身持ち
事始め待たずに歳暮先競う
しきたりへ素直に坐るお元日

岡山県　浜田久米雄

二三日降れば長雨だと言われ
爪切りを途中でやめた十二月
歩かねばならない僕の道を行く
僕だけの道へ桜が咲いてくれ
老化とは淋し総入歯で笑い

和歌山市　野村太茂津

慰謝料を月賦でするると誠意見せ
禁煙と意志の弱さを布れ歩き
スピッツが芥箱漁り倒産す
ぶっちゃけた話が先で解決し
生々流転大器晩成なれのはて

京都府　大鶴喜由

その中の一人撰ぶは恋でない
あれ以来居留守をつかう電話口
奥さんに知恵借りて来たなと思い
三男への意見長男叱っとき
宴会を抜けるオーバの置きどころ

大阪市　正本水客

冬に

あっと云う間に冬支度して谷の木々
肩までの芒が冬を寄せつけず
見渡すかぎり芒歩けば冬がひそんでた
湯煙りと流れの音と月といる
石垣と落葉と城趾音を呑む

大阪市　児島与呂志

口八丁手も八丁の長っ尻
ボーナスへ抜く手も見せず勧誘員
ボーナスを運んだ分の酒をつぎ
商魂はにんにく臭いとも云わず

きらいやと云うのが女の手と知らず　　高槻市　山田季賛
結局は僕が居るからダメと言う
病人に負けてはずれぬプラン立て
土捨場の土の歴史を聞かされる
頭から馬鹿だとハッキリ言うとくれ
十二月やっぱり同じ妻の愚痴

席を蹴って立つ純情を左遷され　　大阪市　本多柳志
未練まだ名刺に元の字がぬけず
表彰も汚職も知らぬ椅子で老け
夕刊で死なせ朝刊で取り消され
失言をして本心が偽われず

コンピューター予測もコンピューターがする　　豊中市　戸田古方
ヴァン・デ・ヴルデに習う齢でなかろうに
ひと筆を入れると表情ちごてくる
ノックせず開けたら個室真っ白い
黄水仙日本のヴィナスは燻し銀

あせるほど考えあらぬ方へ向き　　高槻市　傍島静馬
チャンづけでママの用事を頼まれる

カラーテレビ買うて近所で噂され
一人っ子ふたりの悪いとこが似る
ルンペンをけなるく思う十二月

労組は賃上げのほか手をしらず　　大阪市　後藤梅志
赤んぼの手をねじ私鉄強引な
国鉄をわるい見本にして値上げ
毛さんもマルクスレーニン主義でわね
お師匠も来ない弟子にはお手をあげ

西暦で答えて年をはぐらかし　　大阪市　不二田一三夫
男くさい男と　男に批評され
血を吐いて明治の詩人は書き遺し
寄席（二句）
高座では神話になった「早慶戦」
強要の拍手　それでもうれしそう

酒の値もしらずに酒のつよいひと　　愛媛県　村上旭童
高いからいいときめてる一級酒
腹の虫おさえてしもてねつかれず
湯豆腐のほしい日妻をふと思い

ハワイ　羽佐間柳葉

無礼講三筋に乗らぬ歌も出る
幸運も素手で掴めぬ世の流れ
咽び泣くような音する安い靴
政権に坐れば口約失念し

高槻市　若柳潮花

君憎む日から忘れた月の色
秋の舞台より
振袖の恋へつれない日高川
紅だすき笠森さまへ頼む恋
花笠へ素足の粋を見せて酔い

大阪市　山川阿茶

枯れきった墨絵のような恋の味
虚無僧の手袋のように穴があき
敬老会まだ現役の顔ばかり
八方破れよりまアこれまでやって来た

奈良市　宮口笛生

御馳走をしておくからとボーナス日
ホステスにもてて阿呆な男なり
生きる迄生きるだけなりお元日
辻地蔵ダンプに転げた侭おわし

鳥取市　河村日満

浅津温泉にて（一句）

忙中に閑こしらえて垂れる糸
百人のおんなの靴がみなちがい
自選して出さぬ句に似た句が抜かれ
さよならを云うて男の足となり

倉敷市　野田素身郎

初雪が二十日も早い左遷の地
ボーナスが出たら出たらと飲む話
俺も白髪がふえたと禿を慰める
きれい事並べすぎてる前任者

門真市　福島鉄児

成せばなる格言通りに行きまへん
どないしてんねんやろと不義理の人案じ
どうさらす気やと入墨ちらつかせ
けちんぼで通して派手なお葬式

岡山県　田村藤波

かりそめの善人尻尾見つけられ
除夜の鐘残る一つを強くつき
カズノコの無い正月が気にならず
出稼の父サンタになって戻って来

美禰市　安平次弘道

ああ打てばこう来ぬ碁石にしてやられ
投げ売りをせよと約手の日が迫る

来て欲しい親ほど来ない参観日
思惑が当り世間を甘く見る

大阪市　金井文秋

借金があって小物は落付かず
へそくりを浮かす自信の市場篭
ええかっこしていた奴が借りに来る
劣等感が反響を聞きたがり

香川県　岡田拳法

一たしたつもりがコンマ一だった
苦が絶えぬ俺も存外欲深し
そう思うせいかそうなる不思議なり
よい父であったと言われたく励み

名古屋市　吉田水車

冬眠と言う手もほしや十二月
この頃の餅は素直に箸で切れ
佐藤総裁三選に
修繕は船出してからするつもり
肝臓を病む
お医者さん色よい返事してくれず

笠岡市　木山遠二

交友は凡人ばかりにて愉し
平隠に暮らして運が向いて来ず

日曜と云うに予報の通り雨
セコンドと一対一で不眠症

岡山県　藤原秋月

新米古米乞食も袋を別に持ち
言論の自由と別に無口です
母の背が日毎に曲って行くような
倖せな過去懐かしく日々斜陽

新居浜市　安藤桂仙

母だけが下駄を守っている生活
張り切って見たが尾のない奴凧
倖をつかめば洩るる砂に似て
とばっちり課長補佐まで来て止り

岸和田市　葛城伊三郎

二三人立てば「さくら」が一つ買い
信号青知るや知らずや犬も行く
後から傘差し呉れた知らぬ人
人前を体裁ぶった面憎さ

松原市　谷垣史好

吸取紙のようにおしゃべり聞いてくれ
壁一重気にしてよけい燃えるなり
キーホルダーいやみたらしい音で鳴り
総理登壇もっと面をあげ給え

鳥取県　森田布堂

たくあんの重石も嫁のものとなり
退院の日のやわらかき足の裏
とろろ芋摺る助太刀に汗をかき
伝説の山ふるさとの灯を抱き

鳥取市　藤本礎山

後悔はしないと女の瞳が燃える
さんづけを燃えてる女気にくわず
妻の座に妻が居るから旅も出来
佳き日なり碧い空気の味もほめ

諫早市　川岡霊眼子

てっとうてつび逢うだけでよい友が来る
降ってくれ降ってくれなと人間のずるさ
眼鏡橋街を明るく色づける
人は地にあふれつながる靴の音

大阪市　西森花村

鉄カブト親父は覆面せなんだぞ
締切日は無いとハイ・ミスはげまされ
返還の優勝カップ磨いとき
先ぶれの孫走りだす親の家

尼崎市　長谷川三司

寝返って夢のつづきを見る疲れ
久し振り絵筆がにじむ薔薇の紅
金魚鉢安い金魚が生き残り
何日からか日記を止めてから久し

大阪市　天正千梢

履き捨てへ光らぬ靴の不服なり
本心を問えば女きれたがり
落葉樹形ととのえて冬に入る
皮肉もまじえ存在たしかめる

大阪市　西出一栄

痩せなさい医師はたやすくおっしゃるが
こよみから自分の齢を確かめる
墓地と宝石買うてふと自嘲する
日清日露勝ったいくさにある墓石

大阪市　石倉旅風

再び終りの「鉦たたく」

物の在り場所がわからず鉦たたく
菊好きに菊を供えて鉦たたく
忌明けの夜何も飲まずに寝てしまい
葬送記書き終る時眠むられる

倉敷市　水粉千翁

鍵かけて心休まる日々でなし
公孫樹秋へ背似びをして散らん

まっ直ぐにせわしく歩く歳の暮
そう云えば美人であっただけのこと

倉吉市　奥谷弘朗
何んとなく出来たルールで平和です
保護色を笑顔に秘めたがよう解り
口答え倍に聞える義理の仲
平ばかり下で二階は会議中

藤井寺市　西いわを
物指に合わない女をいつくしみ
開眼をしてそれからは芽が出ない
冬枯を知らず八ツ手の花盛り
一年のつとめを終えた落葉かな

出雲市　原独仙
十二月男飲む日の多かりき
大根の宿命重石と塩に耐え
千鳥足そんなテンポは許されず
息災に生きるよろこび詩へ綴り

笠岡市　木山要次
籾を蒔く時まで土に待つ蛙
髪を刈りながらお客を打診する
姑に泣き姑になり嫁に泣き
琴線に触れたか幽かに眉動く

宇部市　平田実男
門衛の型で立ってる雪ダルマ
女心とり肌立ててミニをはき
大変な事になるぞと嬉しそう
皿だけが見本と同じレストラン

神戸市　仲どんたく
ぜんざいとみつまめ啣るティールーム
ボイラーと対話しているビルの底
ぎっしりと飾って女一人住み
ホステスにナースでありし頃の癖

竹原市　山内静水
のぞかれた財布すっからかんになり
ほめ言葉ばかりおもろうない祝詞
ボーナスは右から右それでよし
幸福なへのへのもへじ傘をさし

大阪市　川口弘生
畏友政近安人君急逝
用心をしいやと君の声残り
貧しさへ不遇の友も尋ねて来
先斗町床の名残りへ菊が咲き
とにかくも生きていますと年賀状

大阪市　中川滋雀

父ちゃんの留守居近所にも頼み
思い出を肴にはずむ酒が冷え
まっ直ぐに歩けば嘘へ突き当り
持って死ねる訳でもないと口辷り

大阪市　木村水洞

金策をあきらめている懐ろ手
再婚へ子供のほうが気をつかい
歯が疚く隣りで妻の高鼾
全治十日の負傷
小難ですんでよかった向うきず

今治市　越智一水

さしかけてくれた女が匂いさす
甘ったるい嘘にほれてる方がのり
投書箱ほこりのつんだままおかれ
子の嫁をえらんだ母が愚痴をいい

宝塚市　小畠無聖

雨しぶき裾をからげた濡れ牡丹
欲すてりゃこんなきれいな雨だった
田んぼ衣が壁にかかって冬近し
カップルが一駅歩くよい景色

京都市　松川杜的

鐘一つ撞くにも仏心のありやなし

粉河寺にて（三句）
マイカーにすねてるように武家屋敷
徳川の権威を偲ぶ屋根の反り
借景の一とこ高野の山も入れ

大阪市　今西章雅

末っ子が若松活ける大晦日
これ高いのよとママゴト苦笑させ
偕老同穴但し子供寺別居する
頓コロで死にたいなどと老の慾

大阪市　福井野迷路

云いにくいこと云わず終いで春迎う
中二女に恋愛か見合いかときかれ
鯖をよむと云う手があった大馬鹿目
コロッケが好きで小二と馬が合い

岡山市　江国幽谷

健康法読めば薬を広告し
味よりも体のための食を摂り
神様も出張して来るほどに墜ち
夫婦ではないから夫婦のように見せ

京都市　都倉求女

心の迷いをインク消しにわらわれる
満員のふんばる声で急停車

美声より蛮声がもてた忘年会
デパートの地下から歳の暮れやってくる

伊丹市　小川静観堂

浮気したことおまっかと娘にきかれ
金魚鉢一ン日だまって泳いでる
生きる権利とべつに安楽死の権利
初暦めくれば八十一が顔を出し

堺市　青野遊仙

妻だけが苛立って居る十二月
三日頃双方疲れる里帰り
値上げです釣りも呉れない散髪屋
せい一杯生きて昨日も明日もなし

兵庫県　河原みのる

或る結婚式にて（一句）
披露宴いつになったら飲めるやら
冬ごもる蛙は元へ埋めてやり
検討してますうちに大臣また更り
月数が合わぬと他がやきもきし

鳥取市　森本法泉子

昼頃になって十二月八日を思い出し
源泉徴収納得してるわけでなし
張る壁がない程カレンダーを呉れ

定量を心得て幹事酌ぎ廻り

西宮市　島居百酒

愛人と情婦男で区別され
ボーナスの記事定退を佗しくし
退職金イザナギ景気を素通りし
絵ハガキへ味も写して旅を頒け

守口市　村田瓢太

ボーナスを貯めろ使えで年の暮
発車ベル立食いのそばせきたてる
せめてもの抵抗襖を閉める音
今朝の冷え籠の小鳥もふくれてる

泉佐野市　大工睦夫

順風の凧に団地は覗かれる
長生きへ終身保険でテコ入れし
二度足のガス集金は恩に着せ
三人連れ矢張り一人は邪魔になり

富田林市　岩田みよ

結論がつかぬ額を又集め
切れそうな神経つなぐ歩がゆるい
前後篇分けて身の上聞かされる
割勘へ鰐と蜥蜴のバック開く

泉大津市　高津徹也

妻よ妻

我が夫婦長命の由頑張ろう
妻愛し幼児のような嘘をつき
わずかずつ貯めた通帳妻とみる
あの声はもう出たらしい女風呂

倉敷市　井上旭峯

釘までが日曜大工馬鹿にする
父親が正装をする楽しい日
判読のジーンとさせる母の文
見栄を張る世帯に雨が漏りはじめ

岡山市　川端柳子

何時もこうしてなさいよと化粧され
へそくりのやり場六法にも学び
よう言うてよう聞いたのが飲みあかし
父の忌日に
今年はふたり空のどこかに夫婦星

倉敷市　小幡里風

世をすねた顔で尼僧の焚く枯葉
吊し柿ぼんやり乾く白い壁
サヨナラをすねて愛情打診する

今治市　小笠原青女

大物のはたで小物がよくしゃべり
屁理屈も明治生れはすじが入り
欲得も捨てよと除夜の鐘がなり

玉野市　小谷仙山

労働者骨身を売った金で飲み
明治百年良薬さえも甘くなる
にやにやと証拠掴んでいる強さ

大阪市　宮尾あいき

補装する土へ雑草しがみつき
貴方でも写せますとは気にいらず
手助けに来る娘に孫がついて来る

岡山県　横山一声

自家用車買うてから会社よくさぼり
庭石のよさ風雪に耐えたあと
お寺さん保育園ばかりへ力いれ

笠岡市　出原真奇

まだ力あると錆釘しがみつき
犬に菓子やったに隣りおこりゃはり
老人のとぼとぼとぼと雨の中

鳥取県　清水一保

味覚から離れて残る柿の色
冬仕度して咲く花も有り散るも有り
修繕をしてまで肉体酷使する

八尾市　古川鶴声

跡たたぬ噂の中に生きる人
奉賀帳善意と見栄が肩並べ
童心に返りPTAハトポッポ

広島県　高橋鬼焼

結論のでぬまま女の歩にまかせ
妻の愚痴いっしょにすわす換気扇
ふんぎりのつかないままに発車ベル

竹原市　小島蘭幸

無一文の頃の貴方が好きだった
ちっぽけな夢だが僕を支えてる
よく見れば淋しそうなるつけまつ毛

大阪市　室谷鉄舟

接種して一番先に風邪をひき
釣れんので飲んで帰れば疑われ
目がすわるとこまでボーナス腰を据え

大阪市　酒田清子

白内障と云われて（一句）
うすれ行く視界へ目をこすりまばたきし
温室の中で寝ていて風邪を引き
ド根性出そうと思えば息切れし

堺　市　高橋千万子

小松市　馬場魚山

ふり袖で見合しミニでデートする
ささやかと書いた豪華な披露宴
和服には和服の言葉使う人

守口市　羽原静歩

東北に育ちズーズー弁で泣き
大賞の菊上段でかしこまり
幸せであろかお嫁にいったきり

熊本県　有働芳仙

いい人でしたと名前忘れとり
漫画本スラスラ読んで神経科
外遊の後へ月賦がのしかかり

笠岡市　松本忠三

ライバルは拍手を背に聞いて消え
遺産分け十年前の事で揉め
生活の知恵か女の空涙

高石市　谷沢好祐

ブランコの紐が切れてる遊園地
終業のベルを給仕が督促し
飲みなさい男でしょうとにじり寄り
政治家は漫画になってる中が花
台所からスモッグの夕餉時

成績を比べる父の子等ぼやき

高槻市　福田丁路

下請のその下請という会社
今日は今日明日は明日よととぼけ顔
闘志満々時には仏顔になり

兵庫県　遠山可住

経済のひずみへ母の肩を揉む
涙なき女よ銭を着て歩け
ヤケ酒も馬鹿らし黙っているとする

香川県　三井酔夢

参りました清貧に生く難しさ
泣くと云う手もあり乍ら意地っぱり
すすきとの対話愛憎さえ空し

小平市　石居高志

数の子は今年もやめて予算組む
がめつさの順に売上げ伸ばして来
三年連続売上目標達成
就任三年無傷のままの金字塔

大阪市　河井庸佑

代役でつかんだチャンスにがさない
成せば成る教訓通りはかどらず
ホッとしたその手へ仕事追ってくる

倉敷市　木村千容

鶏鳴新春を告げまさに八十三
余命いま仏と語る日課あり
ご機嫌は今朝快通を語る顔

岡山県　池田古心

毛糸編仔猫は邪魔する玉を取り
モルモット殺される事知らず喰い
又しても忘れる薬飲む因果

松江市　舟木与根一

媚の目にしては痛いつねりよう
霊柩車スピード違反でとぶ師走
東大紛争
白蟻が象牙の塔へつきはじめ

大阪市　水谷竹荘

明治の顔ならび明治の恋をほめ
田舎でもよし肩書は支店長
席ゆずりたいよな美人前に立ち

島根県　藤井明朗

有難し停退閑にしてくれず
産声に決心ついた男親
保存する程献血の追いつけず

奈良市　村上春巳

ペンダコの手で日曜の釘を打つ

東大寺写すカメラの屋根が欠け
弁当を食べられた鹿写ってる

松江市　岡崎祥月

木の葉ひらひら雨の音風の音
上役の心さぐりつさぐられつ
師走師走頬っぺをなぶり風は去り

呉市　林野甦光

旅に出る朝湯を娘気を効かせ
結局は殺され損でけりが付き
言訳の無駄を善意に誤解され

兵庫県　大江秋月

頂上の雪踏んで見る初日の出
元日の汽車は混んでもすがすがし
快くなったことはお医者へ告げに来ず

桜井市　岩本雀踊子

日本髪後姿も見てもらい
じゃんけんに負けず嫌いがすねている
だしぬけに悪友知恵をかせと云う

大阪市　吉岡美房

迷い子をやっと寝かせて手配済み
すぐ署長呼べと泥酔がなりたて
やったのかやられたのかと事故を聞き

室戸市　奴田原紅雨

死花を咲かせた墓の横で撮り
父に酌ぎ子に酌ぎそとは細雪
六十年なんでもなかった春の雨

岡山県　大森娯句楽

落葉焚く烟に泣き泣き暖をとる
小春日にして観光を喜ばせ
収穫終り籾殻の山煙り

平田市　久家代仕男

釣り競技捨てる海豚まで見てもらい
口下手の誠意汲みとる手が挙がり
結構な話に火種つぎ足され

芦屋市　丸川初甫

同窓会出席
温室で一緒に育った花と逢い
末席が好きで出世の夢を見ず
桃山御陵献華式
若松の一本一本に神宿る

下関市　桜川不水

伝来の賜杯に屠蘇の香りかな
女同士掏られた額にヒレをつけ
義足の子あぶない石を除けてゆき

富田林市　川端東雲楼

着ぶくれていても美くし美女は美女
避地左遷くびよりましと妻いとし
言いわけを練る吊革の手がしびれ

鹿児島市　土岐トク子

素直な子育て教育ママの道もたち
流れよる重荷に耐えて今日くるる
母の詩贈りて泣かす誕生日

八尾市　高杉鬼遊

奥様へよろしくなどと逃げ給う
求人の旅とぼとぼと山を越え
カレンダーの一枚きりが慌ただしい

大阪市　西川誓二

神農祭明治を写す道修町
涙顔妻は寝返り打って秘め
大晦日トコトン儲けて寝正月

和歌山市　西尾公作

浮気する金も持たさず女房妬き
パパ元気ねとホステスにあまえられ
お見合いに元気な膝をそこで見せ

大阪市　宮地双楽

太陽のような太子の和にしたり

堺市　新谷笑痴

おでん鍋明治の味を煮つめてい
年とれど生命かみしめ夢すてず
公立へ一本やりの鉢巻し
親に似た児とあきらめる進学期
先生も言うてはったと児の瞳

熊本市　楠田英子

青空へ語りかけてる柿の色
だまされた女家裁でよくしゃべり
餅つかぬ正月貧しさ故でなく

久留米市　永松道雄

主婦連の値上反対薄化粧
南北の和平を祈る渡鳥
平和そに見えて歩調の合わぬ家

枚方市　宮川珠笑

降り込まれ予報当った腹も立て
しびれてる足に読経の長すぎる
今買うた定期改札見てくれず

大阪市　福井多蘭子

明治百年記念金盃（一句）

金色に秘めて明治が生きている
莨うまくなったと風邪の話をし

円福寺達磨忌
山門の小鳥お詣りに驚かず
和歌山市　垂井葵水
往年の不良にちょっと知恵を借り
元気です花婿に添う娘の字
湯タンポを入れて誰にも会いたくない
大阪市　西岡洛酔
ふる里はまだまだ牛も御健在
牛乳にトーストサラリーマンは朝を駈け
姫路市　隠岐不酔
この効めあれと祈ってする歳暮
意義なしへさくら賛成を高唱し
愛媛県　渡辺暁童
電気がま瓦斯のかまだと妻多情
秋の夜の旅情とやいう特級酒
富田林市　浅川八郎
この病身なさけない気もする長寿筋
レントゲン未だ注射を続けと言う
松江市　柳楽鶴丸
人身一新ならず政治持つ不安
替歌になる流行歌喜ばれ
加賀市　細呂木魯木

凡夫から脱しきれない初詣
宿命とあきらめきれない吾が悲運
ハワイ　上田紅渓
爆撃をやめて平和の神を呼び
遅くまで待ったラジオで高見まけ

★

清水白柳
渡り鳥何を喋るか列を乱す
魂の重さを計る皿白し
渚に立てば信じたくない色ばかり
三太郎先生を悼む
返事などしないよという星に逝く
川村好郎
欲しいのをかくし値切ったままで去に
アドバルーン師走の空へ気楽そう
生きる執念冬蝿の障子這う
寝て起きるこれも一期の旅のうち
かんたんに一決猫は捨てられる
西尾栞
還暦が自分であったあわてよう
暮からのこの楽しみの寝正月
旅枕雨にしあれば雨の詩
カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭

腕組んだ思案を妻に見つめられ

孫の話はせんとこう三カ日
歯が二本生えてコップで飲みたがり
忘年会新年会奈良漬けになってます
二日酔い酒悪るかったせいにする
古本屋漁るには気が滅入り過ぎ

北川春巣

決断力まだまだ社長やめぬ肚
同業に負けぬボーナス胸を張り
ケチでない小瓶にしとく老の酒
手相観に六十の運勢聞いてみる
金婚へもう四五年をいとおしみ

若本多久志

日めくりのそのままとなる愛かなし
凧とりの中の凧の眼がきれい
チップはずんだだけ阿呆な恋おわる
額づけば石にいのちの声がする
野仏も口利きたかろ向い風

菊沢小松園

★

社告・四月号から本田恵二朗氏が〃初歩教室〃を菊沢小松園氏が雑詠選者になります。

川柳塔社

トヨタ自動車指定工場

自動車販売・修理・板金・塗装

三和自動車工業㈱

代表取締役 八木摩天郎

堺市大仙中町5　電堺(41)2685

川傍柳初篇研究（六十八）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

537　**間男て割に合ぬ八八牧也**（やまき）　五扇

岡崎＝「八牧」といえば山木とも書いて、静岡県田方郡韮山村の大字。ここに平兼隆が館を構え、八牧判官と称して威を近隣に振っていた。治承四年八月、源頼朝が以仁王の令旨を奉じて伊豆に挙兵したとき、不意に八牧館を襲って兼隆を仆し、源氏旗上げの血祭にした――という故事があり、更に主題句に関係のありそうな次の句を拾ったが不詳。

八牧の比翼でつるし蜻蛉飛び　一一七・31

藤井＝頼朝伊豆蛭ケ島に配流の身の上のとき、つれづれの余り監視役たる北条時政の娘政子の許へ通った。時政も頼朝の将来性を買って黙許したらしい。この間男の頼朝が挙兵して八牧の館に平兼隆を亡ぼした史実を柳化した句。頼朝はもともと妹の方へ気があったのを姉の政子は吉夢により妹への恋文を策を以って手に入れ、玉の輿に乗ったとあるから北条親子共仲々抜け目なかった。飼犬にかまれた平兼隆は割に合わぬわけだ。「相州の聟佐殿はきついこと」「七ころび八牧義兵のお手はじめ」

川端＝八牧の館を亡ぼし石橋山に陣したが大庭景親に攻められ七騎で落ちのびたのだが「割に合ぬ」がわからない。伊東入道には関係ないだろうか？

高須＝政子は娘だから頼朝は間男ではないこの八牧の判官について「間男」とのつながりなきや？

前田＝不解。美人局であろうか。

丸＝時政は娘政子を平兼隆に嫁がせようと思っていたが、頼朝の人がらを見て政子との交際を黙認していた。だから兼隆から見て頼朝を間男と見ることもできなくもない間男をされ五両（七両二分）にもならぬどころか挙兵の血祭りにあげられるとは、八牧の判官にとっては、全くもって割に合わないことだ、と一応解してみたが、「間男て」の「て」を「されて」の意と見るのは無理と思うので、この解も落着かない。

岡田＝北条時政は平家方である。平氏からとがめられるのを考慮して、長女の政子が頼朝と通じているのを知ると、かねて八牧判官（山木判官が正しく、劇などで八牧としたので、川柳には山木と八牧の両方が出てくる）と婚約が出来ていたので、急いで八牧判官のもとに嫁がせた。するとその夜政子は侍女と二人で八牧の屋敷をひそかに抜け出し、頼朝のもとに走った。頼朝は身の危険を考え、政子と山を越えて逃れ、伊豆山権現に身をかくしたのである。時政はそれを知ったが、気の強い長女がそういう態度に出たからはやむを得ぬ、と娘の行方

をそれ以上追究しなかった。とにかくこれで平家方の八牧判官との婚約も果たしたのだし、もし平家方から文句をつけられてもふしだらな娘の所業はふらちだが、その行方はわからなかった……と一応の云いひらきが出来るからであり、一方においては頼朝を利用してあわよくば……の陰謀があったからである。とにかくこういった理由からして、頼朝挙兵の血祭りには、八牧の陣を襲いこれを滅ぼした。八牧判官にとっては、一たん貰った嫁を盗まれたのだから、いわば頼朝に間男をされたことになる。その間男に殺されたのでは、八牧は一ばんワリに合わぬ……という意味の句である。

丸＝御高説を謝す「て」はやはり「されて」と見るか。

538 **とこの質屋だいゝなよと下女せたけ**　眠狐

岡崎＝世渡りに長じた下女が、田舎出の色に、どこの質屋に入れているのか、受け出して来てやろう——など世話をやいているのである。「せたけ」は催促すること。

　利息をば私が出そうと下女せたけ　九・28

藤井＝世渡りに長じた下女よりも、可愛い男を思う下女の可憐さを私は買う。すっかり世話女房になりきっている下女。

高須＝下女の情夫が、何とかゴマカして、下女の物を借りて入質してしまった。それがなかなか戻らぬので、下女が立腹して「質は私が受け出すから、どこへ入れたか教えてくれ」とセッツイているのである。

　下女色に布子をうけてくれという　一〇・21
　下女心がわりで質をたてこづき　一九・17

という類句もある。

前田＝岡崎プラス藤井説に賛。

丸＝同上。

岡田＝小生は高須説に賛。

539 **あした敵をうちますとお十念**　門柳

岡崎＝「お十念」は念仏を十遍唱える事。討たれた親の遺骸に向って、仇討を誓っている——とすると、おそらく浄土宗の談義僧が、宗旨の説教のほかに講釈して聞かせた敵討物のひとくだりであろう。

　あすは敵をうちますと談義僧　安四亀2

藤井＝不解。「あした」の意味が礎解では不充分。所謂仇討でなく、念仏講の仇討とも考えられるが、お十念を念仏講と見るのも無理だろうと思う。

川端＝「あした」は「いよいよ明日は仇討この講釈のクライマックスであります。乞御期待」で、つづき講釈の翌日の予告であろう。「お十念」は宗旨まで考えずとも、話が闇討ちで、殺された場面とみて、よいのではないか。

　討死を日送りにする講釈師
　講釈の敵はあすへ逃げのびる
　入のあるうちは敵を打もらし

高須＝礎稿やや不十分。談義僧が「敵討ちは明日」と談義を打切った後へ、和尚様が出て「お十念」を授ける（百樹先生説）である。

丸＝百樹翁の説に従う。

岡田＝大きな寺なら百樹説も成立つが、普通の寺だと和尚が法話を面白くし、信者をあきさせぬために、講談師そこのけのお談義をしたあと、真面目くさって十念を唱える。「あした敵をうちますとお十念」の句調からすると、やはり同一人物と解すべきかその方が、はるかに柳味があると思うが。

540 **生酔ハぶち殺されたやうに寝る**　眠狐

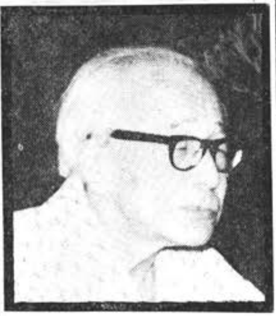
岡崎＝字義どおり酔っぱらって、前後も知らず眠るというだけ。

高須＝生酔の生態を詠んだ句は沢山ある。

　生酔をかついで通る俄雨　一〇・10
　生酔はもたれかかるがきつい好　九・37
　生酔のつきのめされる形りに寝る　八・31
　生酔のつっかい棒に芸子なる　九・1

前田＝「ぶち殺された」はうまい。

丸・岡田＝賛。



川上三太郎氏を悼む

中島生々庵

川上三太郎氏がなくなられた。ご本人にしてみれば、功なり名とげた大往生であったとも言える。しかし川柳界にとってはいろいろな意味で、大御所の一人だったに間違いはなく、失なった空白は大きい。翌日の「よみうり寸評」は──現代庶民の悲喜哀歓を主題とする新川柳に生涯をかけたというべきだろう──と評していた。これは同じく東京毎夕に席をおいた吉川雉子郎とは別の歩き方をして「川柳研究」一筋に生きた事を賞しての事であって私は決して過大評価ではないと思う。死の直前までギッシリ数か月後までのスケジュールを組みかさねながら、多方面に層の深い話題と行動とを提供していた点でも、その情熱や精力的なところは路郎、水府両故人と共に永く川柳界の歴史として残るであろう。

殊に授褒章を授けられた際、妙につむじを曲げたり、すねたりする風も見せず、素直に川柳界全体の歓びであるとして受けとった事は非常に好感が持てた。決して水臭ささを粧う歓び顔でもなく、勿論思い上がった個人の誇りでもなく、ほんとうに心から、一筋に川柳を愛し、川柳に生きて来た者だけが感じる歓びであった。私はその授章祝賀が東京の湯島会館で催された式場で祝辞を申上げたが、その時のご挨拶の言葉や態度にもありありとその事が伺えたのである。

極めて一徹である裏面に又極めて童心的涙もろさを持っていた事は、たんに東京の下町に生まれ育ったというばかりでなく、路郎、水府氏等にも共通した、いわば川柳人としての代表的美点というようなものを多分に所有されていたと思う。左薬指にさしている指輪について前に尋ねた事がある。「聞いてくれるなら話そうが、実はこれ、親父が私のために作ってくれたものだ。今となっては肌身離せぬ思い出とも、わが身のお護り札ともなっている」と来歴を語り、父を語れば自然母を偲ぶ話となり、わが親を褒める愚かさを笑えば笑えだ。私が後年川柳の道を歩きはじめた大きな因は実に母の熱意と根気と父のお蔭である──話に熱が入ってくると童顔に心なしか眼がうるんで見えた。

又先年大腸切断手術をやって生死の境を出入りして、術後の大切な時期というのに肝心な注射や服薬を拒み、付添いや受持医を困らしていると聞き、私が枕頭で稍々顔容を更めて強く忠告したところ、これは又まことに素

直に従順な羊の様になり医療を受けたという話。しかも恢復後私の無躾な苦言を多として筆に言葉に、生々庵はいのちの恩人であると迄しばしば言いふらして私を困らせたこと。全く前述の性格を遺憾なく露呈しているものと言えるだろう。

今度の病気は前の大病とは全く別の疾患であることを想像したので、渡辺蓮夫編集長にまでひそかに病状のお伺いを立て一日も早くご全快を祈って居った。たまたま荊妻小石が十二月三日所要があって上京したので東中野のお宅までお見舞に参上したところ、経過が極めて良好で、数日前退院し、調布の令嬢のお宅で安静中であると承り帰って来た。多少不安に思いはしながらも喜び合った事であった。次で十二月二十日こんどは医師会の用向きで急に私が上京することになり、二十一日午前東中野にお電話申し上げたところ、依然引き続き調布で、ますます奇蹟的な恢復振り食欲も出るし、体重も増加し、日当りのいい室で顔も黒く焼けての元気さ、調布で越年すると申して居りますとの奥様のお言葉であった。これで安心して帰阪するとたった二日おおいてご急逝の悲報が追いかけて来たのである。唖然として悲しみ、お会いしなかったのが返えすがえすも残念でならなかった。

思い出してみると九月八日岡山県弓削での大会で選者控室で昼食の折詰を並んで頂きつつ雑談暫らく、そして小石が吟味を重ねて心斎橋で求めたネクタイを差し上げたところ、例の童顔をほころばし、奥さんによろしくと喜こんでくれた三太郎さんのお姿。一足早く帰る私を廊下で見送って下さったあのお姿。それが最後になろうとは知るよしもなかったとは言え何としても残念で悲しくてならぬ。

異本「柳多留」にお答え

岡田　甫

昨年十二月号に、吉田水車氏が「異本柳樽について」という一文を書いていらっしゃる。「柳多留」第二編の原本を入手されて、その原本にいろいろ疑問を持たれたようですが、一口で申し上げますと、氏が入手された原本は後摺本だ、ということです。

なぜそう断定できるかと申しますと、第一に、吉田さんの原本は、丁付が終丁だけにしか付いていないという。初摺本にはもちろん全部にちゃんと丁付がある。その丁付（ペー

磨かれた伝統の味

御菓子司
鶴屋八幡

本　店・大阪市東区今橋５・電話（203）7281
東京店・東京都千代田区麹町２・電話（261）3996
売　店・各百貨店のれん街

ジ数）を削ったために、初摺本をテキストとした岩波文庫本などと順序が狂っているわけで、別に「新味をもたせる意味合から」でもなく、また異本でもありません。

　それなら、なぜ丁付を削ったかを申しますと、これは寛政二年の寛政改革、その間接的な影響でした。別に「柳多留」の内容がおとがめを受けたわけではなく、それから十年もたってから、寛政十二年に二十九編が出たあとで、それまで出た二十九回のうち、改革の趣旨にそわない句を相当数、版元が自発的に削りました。削った部分には、他の編の何丁分かをつぶし、版木ですから一句ずつコマ切れにして、削った句のところへ埋めたのです。これを＜入木＞と申しますが、版木に穴をあけ、そこに一句分を挿入したわけです。それだけに丁数が減っても来ますし、落丁本も当然出て来ます。めんどうなので丁付を削って、落丁らしく見せました。

　ところが第二編に、幸いに一句も削る句がなく、また削った丁もない。だからそのままにしておけばいいのに、その折りに無きずのこの編の丁付も（初編も同様）ウッカリ削ってしまった。それで丁付がなくなったから、重版のときに順序がわからず、いい加減に綴じてある…というわけでした。

　なお吉田さんの入手された原本が、寛政以降（つまり第二編が出てから約三十年以上もあと）の後摺本である証拠は、その奥付からも云えます。（吉田さんは、呉綾軒可有の奥付もちゃんと付いていると書いておられますが、これは奥付でなく巻末付録の歌仙で、広告の部分が奥付なのです。）初摺本の奥付にはそんな広告などなく、「明和四年」の刊行年月も明記されております。

　また吉田さんは、表題の「誹風屋奈貴多留」という字も気にしていらっしゃるが、後摺本は、柳樽・家内喜多留、屋那支多留その他いろいろ変った文字の表題が貼ってあります。その後、ずっと「誹風柳多留」に統一されましたが…。これで大たい、氏の疑問とされた点にお答えができたかと存じます。

　さて終りに余計なことながら一言申しますと、俳句の方面では、芭蕉を始めとして江戸時代の作を、現代作家の方もみんな勉強しております。川柳作家だけが、古いものにはおよそ無関心ですごしているわけですが、これはむしろ変則的な、不思議な現象だと申していいでしょう。なぜなら古川柳は、やっぱり

雅号ぶっちゃけばなし（47）

北川春巣（はるす きたがわ）

　高校（旧制）時代、ドイツ語の雑誌へ投稿するペンネームをHANSとつけていました。これは太郎というような男の子の名前ですが、比喩的には「馬鹿者」という意味にもなります。大学で川柳をはじめ、号をつける時、HANSのNをLに替えてHALSにしました。これは「首」という意味です。首は馬鹿者どころか、身体では頭に次ぐ大切な部分です。しかし自分は頭ではない、あくまでも首だと考えています。ローマ字で書けば、HARUSUですが、日本語の発音では区別できません。これに「春巣」という字を当てたのですが、この漢字の意味もないではありません。しかしそれは長くなるので略します。

医師（大阪市交通局病院院長）

自分の没頭している仕事の先祖なんですからね。自分の先祖はどんな家系であったのか、そう深い知識をもたれないまでも、大たいは知っておくべきでありましょう。

その点で現代川柳作家の方が、こういう原本までも手に入れられ、それについて、いろいろと疑問を持たれた吉田さんの態度には、大いに敬意を表したいと思います。また吉田さんが、そういう古い柳書にまで関心を持たれているのに、十二月号を見てもお作りなさっている句は、

文明のルツボへ急ぐ朝の列

というような、新味のあるいい句を作っていらっしゃる。これにも感服いたしました。

ユーモアを川柳へ

福井野迷路

英文学者夏目漱石の親友厨川白村も又我が国英文学の大家であった。漱石が一高東大の先生をやり白村が三高京大の先生をやった明治末年に私は三高で白村の教えを受けた。先生は英語のユーモアについて長い講釈をしたが、大体次のようなことを記憶する。

我が国のニワカや落語（当時万才はなかった）とは質の違った笑い、即ちアングロサクサンの永い伝統と教養が培われた笑い、即ち口を開いてアハヽヽと笑わず心の中で笑い閉じた口をちょっとゆがめる程度の笑いで、日本人の一瞬的な無意味な爆笑や又は霧散するものではない。長く脳裏に留って折にふれ生活に潤いを与えてくれるもだと説いた。例えば漱石の猫や坊ちゃんが半世紀後の日本人の心のふる里になっているように川柳にもそんな空気がほしい。

「子沢山僕の枕はどこへいた」のようなものである。川柳塔誌一カ年の間に漱石や白村がいたら膝を打つような句を抜き書きしておいたが作家名を落していた。これも又面白からんと十数句だけ左に序列不問掲載して見る

人間とはあの程度です夫です
へべれけになっております無我の境
やけくそで食べてまんねとよく太り
どぶねずみまねて居留守のかくれんぼ
蝿の真似して拝んでるお人好し
水槽空輸オタマジャクシお前もか
皆様のデパート財布すられて来
長髪のいっそチョンマゲ結いなはれ
うつむいた同士ぶつかる十二月
もめるわけ仲裁感心して帰り
諦めて居ると悟りと見た凡愚
逝た人が楽になるように泣いたげる
看板屋交通事故を俯瞰する
ぼく肥満児よとテレビを離れない

さて、このあとへ私の句をと思ったが、ちょっと骨が折れそうなので割愛した。

雅号ぶっちゃけばなし（48）

せいせいあん
中島生々庵
なかじま

生々庵というと蕎麦屋かという。この節蕎麦屋で庵をつけるのは極めてすくない。職業別電話番号簿を調べて見ると東京で5大阪で2しかない。念のため冒頭に書き添えておく。出処は生々流転である。昭和の初め九州に母の隠居宅を造りこれに生々庵と名付け、石の小柱に刻み門前に建てた。終戦後母と共に大阪に移し現在川柳塔本社の玄関前に立っているのがそれで、公式に名乗ったのは昭和十二年路郎門下に入ってからのことである。

本名　蓬太郎（一八九八年生まれ）

〈大陸巷談〉

へそまがり酒徒行伝

東野大八

俳号を杜康という私の酒友が還暦を迎えた。奉天医大の教授をやっていたころからの面識で、今は〃寒医〃と自称する巷間の開業医の端くれである。

越し方六十年、酒ダルなら三百タル、ビールなら八万本を平らげ、アル中にもならず下手なホトトギスをひねくっているのだから、まずまずだな、とこの日も相変らずの気焔をあげ一しおのごきげんぶりであった。

われら大陸の引揚者は、酒座に酒令を設けるのを常とする。一名瓜づるの令ともいい、尻とり、数えうたで座中を流し、その掛合いにトチると罰杯を受けねばならぬ仕組みだ。竹林の七賢人や飲中八家仙のご連中は、よくこの遊びをやったが、女では大酒のみの筆頭楊貴妃で、彼女はこの遊びがおはこであった

ぐるりとかこむは　田という字
そのまん中は　十の字だ
その十の字をおし上げりゃ
古の字となって　一パイ勝った

こんな調子のものだが、李白はこの貴妃の酒興に鬼飲、囚飲、べつ飲、鶴飲を教えた。これは罰杯の酒の飲み方で、べつ飲というのは、すっぽんのマネで、ふとんにくるまり首だけ出して酒杯を傾ける。鶴飲は竹筒の酒を両手を使わずに飲むといったたぐいだ。

李白は若いころはチンピラやくざで、人を殺めて逃亡「剣を杖して遠遊」とうまいことを言っているのはこのことだ。だから酒興も下世話に通じ、自ら罰杯をうけることを心がけた。

桀紂の昔は、酒池肉林といっても酒はどぶろくオンリーであったのを、周の杜康が清酒を発明した。偽帝王莽は、この酒を〃百薬の長〃と推賞した。この言葉と、酒作りの職人を杜康というのは今の世にも日本にまで残っている。

「聊斎志異」を書いた明の蒲松齢いわく

「しらふの時は人並だが、酔えばすっぽんと同じになる。しかし、すっぽんは毎日酒を飲んで酔狂しても本心を失なわず、恩を忘れず目上にも礼を失なわない。人間の中にも、酔わずともすっぽんに劣る奴が多い。昔は〃亀鑑〃として亀を手本にしたが、それなら〃べつ鑑〃というのがあってもよい」

彼ものんべの点では人後に落ちず〃酒人の賦〃という名作を残している。長大な詩だが一行毎に古代からの酒徒行伝をつづっている少しばかりサンプルをお眼にかけよう。（七難しい漢字が多いので読みやすくする）

—一物あり情にかない口によく、これをのめばくんくんとうとうたり。その名を酒となす。功を樹つることすでに久し、もって嘉賓をうたげし、以て膝をうながして献をなし、以て杯ごととして夫婦となる。或は以て詩をつづるカギとなし、また以て愁をはらうホウキとなす。故に曲生しきりにくるとき、騒客の金らんの友。酔郷深きところ、これ愁人の逃避の藪。そうきゅうの台すでになり、しいの功朽ちず、斎の臣よく一石を飲み、学士また五斗と称す。酒はまこと人を以てつたうるものぞかし—

かくして彼はえんえんとして、一行ずつに酒客列伝をうまく織りなしていくことまことに見事である。曲生とは酒席の話術家の意で唐の葉清善が酒友と酒をのんでいると、眉目秀麗の若者が現われ、座持ちのさえをみせるので、剣を抜いて切り伏せる若者は酒ガメに変じた。「逃避の藪」とは七賢人のことで、竹林をヤブと見立てたもの。七賢人の本命阮籍は母の臨終の枕元で酒二斗をのみ、気にくわぬ奴が見舞にくると、モノもいわず白眼でにらみすえてばかりいる。〃白眼視〃というのはここから出た。また仲間の伯倫は、供の者につねにクワを持たせ、われ酔中に卒しなばそこに穴を掘って埋めろと命じた。

「斎の臣よく一石をのみ」とは、史記に出

てくる淳于髠のことだ。説客となり趙に赴き大功を樹てたので、斎王が酒を出したら一石をのみほした。そして下問に答え、酒量はかり難けれど、一石にても酔い一斗にても酔うと答えた。この淳こそ頓智滑稽の元祖で俳諧の創始者である。彼は身長一㍍五十㌢ぐらい宮廷の道化で軽口小ばなしで、斎王以下を笑わせるのが仕事だ。小人や、女形が、無療な宮中生活者に対し笑いやくつろぎを与えたわけだが、この連中を俳優と称した。つまり人に非らざる役者どもという蔑視感がそこにある。優というのは、女形の代名詞でもある。東西相隔絶した世紀前に、西洋ではエジプト、ローマの世に侏儒がいて、彼等も宮廷の機嫌をとり結んでいた例と思い合わせ、人間世界のこの妖奇な相似性にリツ然となるわけだが、サーカスの小人は今の世にも現存しており、日本では俳優を河原乞食とする卑賤観は、世界観の因襲によるわけだ。とにかく淳は、史記にも記された不世出の人材で、孔子すらへこませている。俳諧の文字は、淳によって作字され、川柳人の柳味の草分けこそ、この人だと私は考えている。

つぎに「学士また五斗と称す」は、唐の王績のことで、五斗先生伝を書いた人物。この人物の後輩が飲中八仙歌の李白以下の八人のサムライという段どりになる。この八仙歌の作者は杜甫で、唐宮廷の至極人間的な、酒によせる反骨ぶりや、無抵抗の中のそのレジスタンスの八名士の人となりにニヒルを酌みとって詩にまとめた。

杜甫は悪宰相李林甫に、その豊かな才能故に蹴落された数多人材の一人で、林甫が「野に遺賢なし」と、人材をしめ出してのち豪語したのがショックとなり、放浪の詩人たる運命に泣くわけだ。

杜甫は「読書人は知識があっても金持ちになれない宿命を持っている」と定義した。彼は放浪の果、飢死した。その点、李白は幸せで、彼らしく見事に酔死した。李は才力に酒を得て天馬空を行き、法なきことは老荘のごとく、天仙さながらの詩をつづった。一方杜はどうか、刻苦勉励して部伍整然、孔孟のごとく法度尊重寒乞の語を成し、ついに窮死した。この対象的な中国詩壇の双璧を見くらべるとき、果してどちらが幸福か。

陶淵明は、酒をこすのに自分のかぶった葛巾を用い、それがすむともと通りにかぶって飲み、酔中の名作五柳先生伝を書いた。

唐の張旭は草書の元祖で、俗に草聖と称されたが、あにはからんや彼は、酔うと自分の頭髪を墨汁に浸し、それで揮毫し「酒に神助あり」とその筆法の開拓を自賛した。

酒一斗詩百篇の李白は、酔うと即興の詩章は垂直に冲天高く舞い上るため意に任せぬ筆墨をなげ打って、詩は酔境に帰するといった。酔った白楽天は水に映る月影に詩を見出し、それをつかみそこねておぼれ死んだ。

私は思う。酒仙の境地で、脳中に花火のスターマインのごとく、詩の奔流を意識するとき、その即興詩を筆稿に止めて川柳句とせんか、友はいう、最も新らしき絶唱の詩川柳なりと、だが私はそうした前衛川柳は敬遠したい。なぜなら、唐の「管城子話」にこんなことが書いてあるからだ。

李白をマネて酔中の詩をひけらかした男が李白の向こうを張って李赤と号した。ところがある日、筆のお化けに誅殺された。筆の別名を管城子というのだが、その筆のお化けはなぜ怒ったか、アルコールの幻想によって己が才分を別ものに仕上げ、罪なき他人に心労をおぼさしめるは、余輩の本分ではないからだ、と。どうやらこの管城子先生は根っからの酒ぎらいとみえた。

川柳徳川記（二）

家康（一）

冨士野鞍馬

寅歳岡崎に生まる

家康は、天文十一年（一五四二）壬寅十二月二十六日、岡崎城内で生れた。父は松平広忠、母は三州苅谷城主水野左衛門太夫忠政の娘、幼名を竹千代といった。

天下天下岡崎で御誕生　（一〇四12）
—天上天下は釈迦—
三の字を横縦にして御誕生　（八五26）
—三川—
御生国ほうらい山もよそならず（安九礼1）
—鳳来寺—
御生国とてゆびおりの名所也　（五七1）
—八ツ橋—
御生国橋も長者の名が残り（六五9・九六25）
武に猛く橋も矢を引く御生国　（一四一9）
—矢矧橋—
御勝利も岡崎からが御手初め　（七八4）
御勝利も初手は岡崎からの事　（一六25）
岡崎の時からお手がよくまはり（四九33）
—岡崎は三味線の習いはじめ—

と家康出生を川柳でも謳歌している。またその寅歳に附会して、

寅の方大イよいにして御開運　（六五19）
日本の虎数万里の司なり　（八〇13）
御出現峯の奇瑞も寅の年　（一〇六2）
御化身の寅より起る時津風　（一五一24）

などと詠まれ、母が懐妊の時、鳳来寺（長篠の北方）に、十二支にかたどった十二神将の木像を奉祀したのであったが、その中の寅童子が、家康誕生と同時に紛失した。それで家康をこの寅童子の化身であると伝説されている。それにもまた多くの川柳が詠まれて、

古来稀なる失物は鳳来寺　（八三28）
寅坊ヤイと十一神鉦太鼓　（一一六14）
其当座迷子の迷子の寅神やァい（一〇六32）
鳳来寺其日竹籔などさがし　（一四六5）
日本で寅の子を産む鳳来寺　（八〇25）
正法に不思議の有るは寅童子　（一三八24）
聖代に名もあらわれし鳳来寺　（八五29）
山号にならば呼たき鳳来寺　（一一八9）
聖代の瑞鳳来の御化身　（九七9）

等の句があり、この紛失した寅童子は、元和二年（一六一六）四月十七日、家康が死んだ時、七十五年振りで、鳳来寺へ、人の知らない間に帰っていたといわれ、

盗まれたらうで七十五年経ち　（天三）
鉦太鼓止んで迷子の寅帰国　（一四四13）
七十五年気のつかぬ十一支　（九七41）
気のつかぬ神代七十有五年　（六七8）
七十五年凡人の御姿　（安六仁1）
七ナ昔ほど凡人の御すがた　（一五四25）
凡人と化すも七十余年なり　（七九19）
七十年来暫くと寅童子　（一五九14）
寅二体世に争いは止みし頃　（九九32）
方千里飈けて寅の御返像　（一六三9）
太平にして帰す寅の御分体　（八五33）
四月十八日はてな此童子　（一二六20）

とおもしろく詠んでいる。

徳川家康と称す

「御家記」に

「家康公を今川義元より駿河へ御遣し可有之由に付、広忠卿より被遣候。九歳の御年

道にて尾張へ盗取、三年程被成御座、其比安城には備後守（織田信秀）是を取て弟三郎五郎信広を被入置。義元より三河衆を以此城を攻て信広を生捕、其時尾張より竹千代殿を渡し三郎五郎と取替て、御幼少の内は駿河へ被成御座、三州へ御帰国御手広く成也。」

とあり、幼少の竹千代は、尾張の織田へ、また駿河の今川へと転々として苦労したのである。

「日本外史」にも

「天文二十年（一五五一）家康は甫めて十歳なり。五月五日、出でて安倍河原に遊び児童の石戦を観る。一群は百五十人、一群は之に倍す。観る者は争ってその衆き者に就けり。家康は僕の背に在り、命じてその寡き者に就かしむ。僕、怪しみて故を問う。家康曰く「衆き者は自らその衆を恃み寡き者は自らその寡を知る、寡き者勝たん」と。果してその言の如かりき。義元これを聞きて曰く「いわゆる将門将を出すものなり」と。」

と書かれてある。

今川の食客（人質）であった竹千代は、弘治二年（一五五六）十五才の時元服し、義元の一字を貰って、松平元信と名乗り、義元の姪にあたる関口刑部大輔の娘（築山殿）と結婚した。永祿三年（一五六〇）十九才でまた元康と改名した。その年義元は上京の途中、桶狭間で信長の奇襲に敗死したので、元康は食客の身分から解放されて、岡崎に帰った。そこで長男信康が生まれ、翌年長女亀姫が生まれたのである。

義元は重る葵を小田へ植え　（一一四22）
築山の御殿女偏に石のきず　（一三八7）
—後に自害—

永祿五年（一五六二）織田信長（二十九才）と同盟を結び、義元の一字を返して「家康」と改め、さっぱりと今川氏と縁を切り、三河の国を固めることに専念した。

永禄六年（一五六三）の秋、家康は絶縁した今川氏に備えるため、佐崎に砦を築いたがその際の兵糧を、上宮寺から借りることにした。ところがまだ話のつかぬうちに、雑兵たちは、寺から米を運びだしたので、僧徒は怒って、家康の部将たちを攻めた。それが拡大して一向門徒の一揆となり、家康の家臣の中にも一向宗信者がいて、それも一揆に加担したので、まことに複雑な事件になった。

針崎の一揆主君をめどに取り　（一六六16）
針崎の一揆糸をひく御注進　（一六二16）

と川柳に詠まれ、針崎は岡崎の東南、一向宗勝鬘寺のあった所で、世にこの一揆を「針崎一揆」という。家康はこれを六か月で鎮圧した。

永禄九年（一五六六）に「徳川氏」を称したのである。この時家康二十五才であった。

雅号ぶっちゃけばなし（49）

橋本緑雨（はしもと ろくう）

大正十二年二月二日、故竹田芦穂さんと本田溪花坊さんを訪ね、当夜、番傘川柳社の会へ出席。その際、溪花坊さんにつけて貰った「二柳子」が雅号でしたが、女性と間違えられるので、雨の降る山中温泉が好きな私は、緑雨と改めたのである。

本名　橋本与作

無職　明治二十五年九月二十五日生まれ。

雅号ぶっちゃけばなし (50)

たくし

わかもと

若本多久志

たしか昭和十三年頃のこと、安川久留美氏がやって来て、雅号をつけてやろうということになり、当時、貨物自動車会社の重役をしていたのでトラック—即ち「登良久」と命名された。

その後、昭和廿六年から大阪に来て、タクシー会社を創立—不朽洞会の末席にも加えて頂き、「多久志」と改めて今日に至っている。

商売は今、自動車販売に変っているが、改号の意志はない。

それにつけても、川柳入門の指導をして貰った久留美さんの「久」の字がはずれないのも不思議な因縁といえよう。

（会社役員六十六歳）

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

ハンドバッグいのちと共にある如く　（甲　吉）

この句の「いのちと共に」は、誇張したものではないようだ。近頃の女性は、ハンドバッグの中に全財産に近い物を入れている。手廻り品のみではなく。印鑑も、身分証明書も自動車の免許証も、ドアの鍵も、財布、小銭入れ、みな入れている。もし盗られでもしたら、帰りの電車賃もなくなる訳だ。

たかがハンドバッグという勿れ。女のいのちが一っぱいつまっていて。持つ腕も逞しくゴツンと当ればこっちの肱が、赤くはれ上がる。この句、痛烈に世相を衝いている。

のぞいてた愚痴のみこんだ蒸しタオル　（求　女）

「出かかった愚痴」をのぞいてたと云ったところに、どんな愚痴かが判かる。

愚痴は誰れしも、云いたくないのだが、この頃の世間の有様というか、他人の在り方まで、口に出せばグチになる。が社交上、これは慎しまなければならないのである。しかし何かにつけグチになりそうなのを、ふっと、救ってくれた蒸しタオル。情景といい、きっかけといい、その場の心気転換に、この顔にあてた蒸しタオルは、うれしいものであった。

咄嗟に出たらしいこの句は「のぞいてた」が垢ぬけがして、上品な身辺句となった。

晩秋の小諸に泊り想うこと　（日　満）

上越線から信越本線にはいった信州小諸は島崎藤村ゆかりの地で、藤村はここで五ヵ年低迷時代を送った。廿五歳から廿九歳迄。

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萠えず
若草も藉くによしなし

有名な千曲川旅情の歌もここで綴った。日満さんも、これを口称したであろう。

藤村という人の人となりは、篤実で、重厚な資質であったが遅筆家でも有名であった。この小諸での低迷時代を脱して小説「破戒」に着手したころ、一つのエピソードがある。

雑誌「中央公論」では藤村の原稿がおくれ勝ちで困った。当時主幹で編集長の滝田樗陰はこれを聞いて、自身原稿の居催促に藤村居へ出掛けたのである。樗陰（ちょいん）という人は、当時の谷崎潤一郎や吉野作造、島崎藤村達を作家として文壇に拾い上げた、云わば恩人で、編集にかけては名代の辣腕家であった。自身に出掛けるということはよくよくのことであったろうが藤村は例の調子で、ていねいに一字一字毛筆で、楷書に近い字を書

く。間違った箇所は又こくめいに墨で塗りつぶすという始末である。数時間を経過したが流石の樗陰も我を折ってか、何も言わず帰ってしまったそうである。藤村は徹夜でもして書くつもりであったろう。中央公論は、他の雑誌より遅く、毎月七、八日でなければ店頭に現れなかった。

藤村の行為は、持前の篤実さから遅筆のくせを改めなかったのかも知れないが、当時の文壇人には一種の反骨精神というものがあり利を以って誘っても従わなかった。どこかに毅然としたものがあったのである。

黙って帰ってしまった樗陰も面白いし、樗陰を前にしても態度を崩さなかった藤村も面白い。どちらの態度にも、味わいがあって、当時、文壇の語り草となったもののように思われる。

明治の年代は終りを告げたのであるが、どうやらこの時代が、日本精神の黎明期でもあったようだ。

人間が月へ行くげなあちろり　（水　車）

アポロ八号が月をまわって来た。この次は月へ着陸するそうだ。テレビも素晴らしい、素晴らしいというし、科学の進歩には、一目置いていいが、吾々を幻滅の世界に追いやるのは良いとして、一体、月へ着陸をして、何をするのだろうかという疑問がおきる。

現在、南極探険ですらも、安住しては居らぬではないか。一つ間違えば、宇宙の迷い子になるようなところへ、行く人があるだろうか。「なあちろり」これは、燗どっくりにでも訊いてみるほか仕方がないのである。

なあちろりこれから秋に親しまう　路　郎

路郎先生も地下で苦笑していることであろう。

この句、吾人の気持をよく代表している。

自動車学校
コーチには素直に動く車なり　（拳　法）

この句は、ごく、当りまえの句なのだが、吾々には、教えられるものが沢山ある。

大工の使う鋸のようなものでも、大工自身が使えば自由自在になるし、しろうとがもてばペカペカして、歯こぼれができるものであろう。つまり心が通わないのである。

もう一つは、自信である。永年の経験というか、立場への自覚というか、その人々によって機能は全くちがうものとなるのである。

しかし、面白いではないか、心が通ようと通わぬとでは、お月様とすっぽんほどの違いができてくるのである。

作句も、そんなものではないだろうか。

我が影を写して水は流れない　（いわを）

流れのほとりに立っていると、我が影は水の面に映り、水は流れ去る。しかし、流れ去る水は、あとから、あとから流れ来り、尽きることはない。

つまり人類が、死んでも死んでも、あとから、あとから、子供が生れ、尽きることはな

雅号ぶっちゃけばなし（51）

ばいし　ごとう
後藤梅志

私の父は、松雲舎而嘯（しょううんしゃじしょう）という俳人でした。幼少から「句」はおぼえ、父が亡くなる十九歳頃までは「鬼子」という雅号。守護神が鬼子母神からです。母は日蓮の信者。両親共に二十歳迄に没し、それからは独り立ち。社会の荒浪と闘いました。

川柳をつくるようになったのは戦後。名付親は中井蒐析郎。動機は、幼少の頃庭に梅の古木があり毎年二月、東北の寒風を衝いて咲く梅の花が可憐で忘れ難い印象をのこしていた、その梅の花にあやかろうとしたのが、動機でした。青年期は東京で、秀才文壇や文章世界を愛読し、盛んに投書していました。いまは川柳一本です。しかし「謡ひ」が主。

（謡曲指導・七十六歳）

いのと、同じ原理なのである。

芭蕉は、世の中は「不易」と「流行」とがあることを訓えているが、流れる水の姿は流行、止まる影は、不易と観ずる外はない。

縄のれん全学連をさかなとし　（どんたく）

「さかなとし」が面白い。世に公憤をわすれた国民ほど、不幸なものはない。現在の東大学生の在り方、教官の在り方、政府の在り方。一つとして国民の公憤をそそらぬものはないのだが、国民は公憤のもって行き場がないのである。この句は、それをあざ笑うが如く「全学連をさかなとし」としている。縄のれんにも酒の肴はあるのだが、口舌の肴にしているとは侮辱した話だがそのくらいの価値しか市民は認めていない。警官もである。

死ぬまでは俺が死ぬとは思ってず　（弘　生）

皮肉な句だが、その通りだと思った。自分もそうだが、他人も恐らくそうだろうと思うのである。ふだん健康を誇っていてもいつとはなしに年をとり、死ぬようなことになる。一つも例外はないのである。

昨年松江梅里さんが亡くなった時も、あまりにあっけなくこの世を去ったので、感慨無量であったが。時過ぎて考えてみれば、むしろ羨ましいほどの、此の世の去り方であったようにも思えるのである。考えさせる句だ。

子なき身をいつから余生なりとする　（美　房）

この句も考えさせられる句だ。子宝というものを持たぬ人は、意外と多い若い間は、サバサバして良いように思うのだが、年をとるに随い心細くなり、あわて出すのである。

しかし子供があっても、縁（かた）づけてしまうか、息子が早く独立したあとは、老人二人きりになる場合が多い。そのあとは、矢張り同じようなことになる。この句の如く、案外余生は、はやく来てしまうものである。

財産は、死ぬ迄に丁度なくなるように計算してる人さえある。

近作

須坂市　**高峰柳児**

鮮かさ造花とたしかめ引さがり
口紅の濃さにつり合う軽い口
荒れ果てた史跡が村の重荷なり

小松市　**山上千太郎**

もみじ山土に還らん彩に映え
眼薬をさしつさされつ老二人
あざむかれようが善意は楽しかり

今治市　**長野文庫**

歩が金にならず定年来てしまい
判を押すだけには机広すぎる

雅号ぶっちゃけばなし　(52)

しおり　にしお

西尾　栞

僕の最初の号は瘦馬（そうま）といった。次に百酒という号にした。これは百を二つにわると、一白、酒は水の酉だ。僕は一白水星の酉だから、合併して百酒とつけ、百酒洞という洞号にした。僕の川柳は一日一日の栞だと思って、栞を使っているが、本年還暦を迎えるにあたって、余りにも若く、女性的な名なので、もっと老人らしい名前にかえたいとも考えている。

現在の住み家は水鶏がおとずれた淋しいところなので、この頃は百酒洞より、水鶏庵（くいなあん）を使っている。今年の賀状も、水鶏庵栞で御挨拶した次第である。

（水鶏庵栞・会社役員六十歳）

雅号ぶっちゃけばなし（53）

服部十九平（はっとり とくへい）

　トク平は禿平である。併し十九平にしたのは十九にも意味があるからだ。私は陸軍幼年学校に大正四年に入学した。それが第十九期生であった。松竹映画に諸口十九という男優がいた。私は女優では五月信子・男優では諸口十九が好きであった。彼が「椿咲く国」を持って渡米する壮行会が新宿園で催された。その頃陸士に居た私は軍服でその会に赴きミーチャン、ハーチャンに混ってるのを憲兵に見つかり学校へ通報され大目玉を食った。そんなことで益々諸口十九ファンになった。

　昭和二十五年路郎第二句碑が奈良県に建立されその記念徹宵句会の席上、禿三光の天位に推挙されたことを思えば禿平が矢張り本当かも知れぬ。

雅号ぶっちゃけばなし（54）

本田恵二朗（ほんだ けいじろう）

　姓名学の大先生が君の名はいけないから改名しろと言われるのでしからば良き名を授けられたしと願ったところ蘊蓄を傾けて作って下さったのが恵二朗である。つまり呼び名であるが一種の改名であって改めた限りはこの名一辺倒に用いなければ効能が現れないのだそうで、以来あらゆる面で用いることにしたので雅号として作ったわけではない。改名したトタンに川柳がよく生れたり、儲かったり、良い嫁が来て、可愛い孫が生れたり、何もかもが順風の帆みたいになったと自分勝手に思うことにしているがまんざら嘘でない節もちよいちよいあるので気をよくしている。正に心身爽快にして天下泰平である。

（医師・六十二歳）

純良医薬　第一製薬

●140mm×100mm＝3枚入

うちみ・肩こりに
――ペタンと貼るだけ！

《新型パップ剤》
パテックス

秋田　実・主宰・月刊「漫才」
二月号・百円・送料六円
編集・不二田一三夫

近作柳樽

西尾栞選

姫路市　前田芙巳代

ためらわず白磁に触れる指先の汚れ
無数の擦過傷我も氷の肌を持つ
野を分けて一直線に人を恋う
チグハグな音で毀れて夫婦茶碗
スケートへ不満を捨てに来る若さ

米子市　八木千代

旧道の無縁塚から冬に入る
運のいい子で東大を去年出た
忠実に祝辞の誤字も代読し
抱きしめたい気でつまずいた子を叱り
人妻の理性保って落葉踏む

島根県　堀江正朗

めでたい日血圧あがるだけあがれ
さつきまで尋ねあぐんだ物を踏み
ボーナスの縁なき数字聞いて寝る
確めて見ねば手さぐり気が済まず
それとなく子に聞かせたい独り言

大阪市　黒田真砂

回想に酔って独りの夜を更かす
忍従の世に生き星はふる如く
生菓子を求めて京の街そぞろ
こだわりをさらりとコーヒ濃く入れる

竹原市　三宅不朽

愛憎の女こころのあねいもと
束の間をマッチ鋭どく燃えて見せ
平和とか今度は交通未亡人
落日の未練熟柿へぶらさがり

出雲市　王紫

再婚へ女可憐な嘘を秘め
こうなってみれば宿世の縁とみる
悲しさを道化た嘘で拭わんか

外人と謂う総称の中の俺

大阪市　和　田　痴　亭

燃えつきるいのち粗末にまた怒鳴る
正論はけむたがられてズット平
亭主ろうばい老妻赤く髪を染め
冷えこんだ嵯峨野へ通う花鋏

竹原市　森　井　菁　居

名を捨てて生きた心地の草むしり
冬の蠅生きる疑問に突きあたり
観賞用女性と決めて思慕を絶ち
さざんかが散る夜せめても風が無し

竹原市　脇　本　政　己

わがものとして足音を聞く夜なり
潮満ちてまずしきものの消えている
美を追うて哀れ女の食をぬく
誰かきてほしい門灯つけておく

羽曳野市　榎　本　吐　来

税務署が怖い話の阿呆らしさ
自棄酒を飲めば勘定つきまとい
満員の電車の中にある孤独
自惚れた後で自嘲の皺をみる

小松市　四　方　天　弘　美

ミミッチイ夢よ師走のクジを買う
寒村はネオンに勝る紅葉映え
スベリ台に似た人生の日が落ちる

拍子木を打てばアベック道を折れ

神戸市　来　住　タ　カ　子

敗北の涙はとんびにくれてやる
云いわけを聞けば負けそう受話機おく
妬心雨に流せば蚊が待っていた
畦焼いて背信を追いつめる

島根県　中　島　英　子

おかがみが寿ぐ春の風で割れ
生きのびてしのぶ明治の風物詩
デイトには少し不満な星明り
大声に手振りも添える老夫婦

鳥取市　藤　本　和　宏

先生が教育ママを慰める
敏感な少年の瞳をごまかせず
秘めている心配コケシに打明ける
もう手にはおえないと母嬉しがり

鳥取市　藤　本　恵　子

強化米よりも麦飯うまかった
小鳥啼くアカシヤ抜ければ大砂丘
三日後の遠足へもう眠られず
声を聞くまでは男と知らなんだ

島根県　吉　沢　山　我

倖を握り合ってる月の影
子の鏡八面相で泣いちゃった
寝がえりを打って思案のさだまらず

よくしゃべるので迷惑な見舞客

和歌山県　仮　家　和　美

野の風に反古焚く炎美しく
瞬間のニヒルに積木の塔こわる
透明な花にもなって泣いた夜
恋しい日口ぐせそっと真似てみる

鳥取市　稲　村　光　枝

故郷を捨てた二人の四畳半
墓の事きめて掛った再婚者
有難うと握手求める夫であり
若返るつもりを憎い三面鏡

鳥取市　両　川　洋　々

騙されてやるには嘘が大き過ぎ
イエスとは言えずノーとはなお言えず
飲んで飲んで寝て行くひとり旅
老の目をドキリとさせてミニ座る

大阪市　小　谷　葉　子

心迷えるものに川のすなおなり
かりそめの恋オンザロックも京の味
明日変る色彩紅葉のありったけ
ステップを狂わす人　見あたらず

岐阜市　市　川　鱗　魚

夫婦手を添えてどちらもほめられる
師を軟禁孔子はかくも遠くなり
角棒の向うきずとも言えまい

倉敷市　藤　井　春　日

昔なら足軽なみの扶持に生き
ケースから狂い出そうな鏡獅子
トイレにも娘心の四季の花

大阪市　江　成　功　雄

真実を問いたき空は青かった
草枕一途に燃えた過去もなく
宝石を見る時女の瞳にごる

大和郡山市　中　内　孚　彦

ブルジョアの道徳でデモ評価され
全学連そこにはやはりヒロイズム
誤診で死んでも医者は悪びれず

鳥取県　鈴　木　村　諷　子

新築の前に小さな植木鉢
酒場街昼と夜とを逆にして
自家用車救急車霊柩車

米子市　林　瑞　枝

遊んでた子が当て逃げの目撃者
親類の娘を見習うて娘が帰り
再縁の話そらして米をとぎ

大田市　藤　田　軒　太　楼

何気ない世間話にある無心
ネオンつく頃に生々とした顔になり
新聞を楯に聞いてる妻のぐち

出雲市　竹　内　李　朋

同情をしてたら同情されていた
目くばせをしてる電話とよく分り
後れ毛のここから秋の詩となり

竹原市　時　広　一　路

割り込んできたのが無茶なことをゆう
窓の灯が暖かそうな帰り道
来年の為に枯葉を皆落す

島根県　堀　江　芳　子

正座して瞼閉じれば気が和み
方便と思えど嘘に気がとがめ
恩に着ますと傘さして行ったきり

守口市　岸　本　豊　平　次

のびた手を受話機の予感がためらわせ
子等が皆集まって来て母の味
縫上るまでは似合うと思ったに

大阪市　河　内　屋　源　七

夕刊の隅ッこ師走を覚悟の死
煙草の輪おちるとこまで女随ち
けだものの祠人間手を合せ

竹原市　生　信　笑　子

透視するごとし赤子に見つめられ
おかんするその手をそっと取られたり
ほろほろと菊散り急ぐ赤い月

岡山県　目　賀　芳　月

公認をされて浮気がやんでゆき
枝ぶりもいいなと落葉かき集め
わい談が得意子宝に恵まれず

八尾市　高　杉　千　歩

古稀祝う今日は気長に愚痴もきき
枯葉たいてる詩情へ屑籠さげてくる
青年の匂い息子の枕干す

東大阪市　宮　西　弥　生

大の字に寝返える孤児のよう育ち
燃える夜沈めるワインの冷めたさよ
花活けて女ひとりの城に春

下関市　志　賀　木　石

羽織りつつ脱いで女は見せぬ肌
シグナルの赤また赤のような運
国東に古仏を訪ねて
多聞天に俺に似たのが踏まえられ

下関市　志　賀　汀　花

コンニャクの黒さも山の宿らしく
国東に古仏を訪ねて
富貴寺へ芒もおいでおいでする
むかしむかし話しておくれ磨崖仏

尼崎市　中　溪　慶　彦

親の身にもなれとは親のエゴイズム
疑うを知らぬ女房の瞳がまぶし
叱らせておいて子供の肩をもち

島根県　志　賀　美　栄

血圧へ蕎麦ぜめにして息をつぎ
五万円の着物ころがる展示会
蕭々と鳴るは挽歌か冬の音

岡山県　浜口志賀夫

一疋狼これぞ己の宿命ぞと
一疋狼所詮荒野が性に合い
一疋狼偽善の檻に親しめず

出雲市　土江久美

空瓶に透けてみえるような人生
自覚症状退屈以外何もなし
病院は味も色気もないところ

仙台市　川村映輝

割当てて見たらボーナス残りなし
人間の評価七、八十点で良し
安い秋刀魚待っている間に冬がきた

豊岡市　不二本和久

茶をいれる娘に女ふと見つけ
太ってるよってに社長と思わはり
愛されたばかりに人生狂い出し

京都市　藤本征山

後悔は悪酔いしている間だけ
倖せを口にする程母は老い
好きな人あって日記が続くなり

鳥取市　藤本佳女

馬鹿になるコツも覚えて課長補佐
夫婦だけの話とだえた虫しぐれ
小遣いの欲しい子が来る肩たたき

香川県　西山綾子

落第と言わず留年させました
木綿にも見える私の着た紬
二度三度呼ばれて代理思い出し

高槻市　山田スミ子

気前よく払って子供に叱られる
結論を先に言いなと娘が叱り
雨の洩る傘とは知らず貸してくれ

和歌山県　ふきあげ虎城

偽りの夜が明けネオン素顔です
嫉妬心かくさずお茶を入れに立つ
みかんの皮子が来て孫が来て増える

堺市　斎藤亜也

牛乳車来てまた一寝いり霜の朝
混んでいやすいて物足りぬ散髪や
ガタガタの公営住宅からのピアノ

藤井寺市　古結百水

恋の詩作らずなって硯研ぐ
悪足掻きのよう六十の薬服む
にもなってと思い六十でもとも思い

鳥取県　川崎秋女

漬物の石さへ思うのが見付からず
1＋1は2にならぬ世にけつまずき

想い出をあたために行く故郷の道
倉敷市　小　野　克　枝

ささやかに生きて針目を乱さない
思い出を沈めて嘘の顔作る
命の重さに驚く寄りかかる壁
尼崎市　中　谷　利　美

三次会話せぬ奴にされてよし
おいそれと乗れない妻のネーあなた
ラブレターなんとセンスのない文句
高知県　山　川　勝　子

御免なさいと言えない妻を持つ不運
新婚の8ミリ新妻だけ写り
コマーシャルになってお風呂へ腰を上げ
神戸市　横　山　孜　孝

受験する子があり内職はかがゆき
自白したあとで無実の手記を書き
一人では結べぬ帯へおとなしく
羽曳野市　前　川　桂　馬

破芭蕉療養に飽きし生あくび
斗病の弱気百舌鳥が一喝
気があるのと違うか脈の取り工合
羽曳野市　飯　田　一　治

親指の力を検す夏蜜柑
獅子舞の自分の顔も獅子となり
子沢山ぎっちょの箸が邪魔になり

どうしても別れ度くないから悲し
守口市　樋　口　一　峯

初詣一緒に行き度い人が居り
何げ無くいっしょに洗濯してあげる
岡山県　武　元　柳　子

手伝いのつもりが主役にされっちまい
うそついてまでも出て来た事を悔い
孫の歌まだ節がないチューリップ
東大阪市　落　合　思　月

ハイヒールぬいで台所チビた下駄
同じもの買うてもいがむ姉妹
新潟県　高　野　不　二

やりくりを心配しつつ賀状書く
上ってしもうてから株屋すすめに来
東大阪市　竹　中　綾　女

吊皮がいつの間にやら皮で無し
酉年を迎え雛頭たらんとす
東大阪市　竹　中　肖　二

縛られることが苦しい職に就き
定年の父息子は支店長
堺　市　羽　田　一　扇

コート着て女　女の線残し
妻だけは別な女であった恋
大阪市　梅　園　摩　耶

小さな抵抗一番風呂に入る

飛行船大人の夢よ子の夢よ　　仙台市　平野光道

サイレンを聞いていたはずの子をさがす
レセプションどてらで一杯とはちがい　　大阪市　堀口欣一

これは無形文化財のようなやとな
大阪の師走の隅で死んでゆき　　大阪市　岡本まさひろ

旅風さんの奥さんの訃を聞いて
初旅の宿帳は俗名で書いてあり
雨降って地かたまるどころか溝が出来

俺にまで来いとはよほど困ってる
輪飾のかかれるままの救急車　　七尾市　松高秀峰

籠の鳥あきらめきった眼をつぶり
丁寧な言葉になって揉めつづけ　　大阪市　河原林比呂路

稀少価値ねらっては見たが冬の蝶
舌打ちで百舌鳥が冬をたぐりよせ　　島根県　小砂白汀

留守番をたのむよ小鳥に声をかけ
湯上りに百まで計えてぬくもらせ　　河内長野市　森本黒天子

宿直の坐っても見る課長席　　大阪市　西本保夫

住友の主任私生活まで手本　　八幡浜市　別宮すき

霜の量新聞少年だけが知り
しもやけが絹の手袋うけいれず　　鳥取県　近藤秋星

トイレから何か言うてる十二月
せせらぎの音を聞いてる烏瓜　　兵庫県　高橋近江

取り巻いた農機に農夫取り巻かれ
言う程に聞く程になく齢の衰　　鳥取市　谷尾透風

集金人叱言も余計にもらって来
やきもちを手管と知らずヤニ下り　　鳥取市　夏目葉舟

陽当りを追うてママごと座を移し
芋粥の塩味老いの食進め　　善通寺市　伊藤歌子

ボーナスも一夜おうちでねたっきり
又してもキリスト不在のクリスマス　　竹原市　出島静波

意地悪な猫で雨降り帰って来
他人なる家の障子に師走みる　　豊中市　河本雪男

除夜の鐘余いんは胸の底で鳴り
心無にして良心と対話する

長野県　中尾　愛

今日は雨便り待ち佗び菊活けて
雨に濡れ絨氈のごと落葉の美

出雲市　飯塚全喜知

盆栽も病む吾に似て冬眠す
川柳で話のけりをつけにけり

出雲市　安井寿年

俺に若さが欲しい欲しい日々
どの道も稲架の陰より通学す

出雲市　田中泥子

暴力がのさばる明治百年目
足らぬ米に困り余れば又困り

出雲市　和田重夫

月寒く貨車連絡の音高し
人心を決意新たに百年目

大阪市　木村濁水

咳払い父思い出す子が戻り
耳掃除してる方の眼をつむり

大阪市　岩井本蔭棒

心にもない世辞言うて舌をかみ
草原に牛薄命を知らず生き

大阪市　大池　芳

京の舞八十五才で名人賞
渡し舟江戸の古寺秋深し

大阪市　田治一登

鳳輦を引けば牛にも位付き
牛が子を産んで家計が楽に成り

京都府　福村飛龍

赤電話妻に内証をかけにゆく
毎日の行動指紋気にもせず

広島県　南条露声

一口に言えぬ話で喫茶店
玄関の声が大きい久し振り

静岡市　多々良空

落陽のきらめく呼吸銀杏散る
愚かなる夫婦となりて隠居部屋

今治市　古野伶人

十二月何度置いても赤字なり
内閣改造
陳列の人形あちこち入れ替えて

今治市　原田輝親

此の庭に落ち着く石か苔が生え
枯れ落ちる前を紅葉の美しさ

堺　市　藤谷象園

クリスマス神も戸惑うはやりよう
地上より地下が明るいセンタ街

八代市　船木史朗

真にうけて訪ねて行けば留守ばかり
下積みに夢を持たせてゼミナール

大阪市　松岡茶々坊

極楽は地位も名誉も金もなし
別居して相手の良さがよく分り　大阪市　大池聖川

家中がボーナス目当に予算立て
娘持つ母は内緒で易をみる　諫早市　原田明春

辻褄をあわせどたん場で足をだし
ベテランと言われるだけで出世せず　大阪市　有信吐痴男

冬の床ウツボのように作句する
陽当りにたたみ軽かろ漱石亭　寝屋川市　福富隆子

十二月蚊が迷い出る陽気
内職の目先にゴミがぶらさがり　大洲市　堀内暁風

身に余る光栄死んでから授賞
上戸下戸やはりプランに喰い違い　泉佐野市　大工静子

孫丈けて楽になりわびしくもあり
化粧品買うも憚る年になり
強そうに見えて涙に弱い父　泉佐野市　大工チヨ

秋日和団地の窓は蒲団市
旧友を信じて語る裏話　島根県　大森孝華

眉月へ孫と語って落葉焚き　羽咋市　三宅ろ亭

散髪は暖い日を選ってゆき
坊さんの寄付百円札混じり　尼崎市　平井露芳

君あくびするから僕もするあくび
尾の端へ届いて尾長鳴き終り　和歌山市　増田志津穂

全快を落ち葉掃く手がかみしめる
再会の喜こび残る火鉢抱く　和歌山市　増田次章

大根の若さ大地に背のびする
伊勢エビがにわかに動く何思う　岡山県　片山雅子

気の早いタコが師走の空に舞い
十二月来客借金とりに見え　大阪市　島野大吉

恙なく目出度い蕎麦の箸を割る
敬老会未練な顔で南無阿弥陀　河内長野市　小川耕人

前衛画逆さに見ても素晴しく
母子手帳貰ってよい子が生れそう　熊本市　黒田緑

歯車になり魂はあたためる
逆らわず落葉は土に身を任せ

湯疲れを帰っていやす父母の旅　呉市　槇田英詩
噂するたたり旧家のせいにされ

カニ泡を吹きあげ子等の輪に泣けり　松江市　村松酔歩
老人の日の老人で肩がこり

年金も退職金も教育費　西宮市　加納聖司
長屋にも春が来るらし人往き来

賽銭は一度祈りにふむ百度　大阪市　伊藤一雲
義理固く芸能人は離婚する

孫の手へ曲った腰も延びそうに　熊本市　北川一進
廻るだけ廻って女送らせる

ネグリジエの気ままなすねたり挑んだり　愛媛県　嶝本満子
愛情を語るにドギツイアイシャード

葱一把さげて気楽な老いやもめ　大阪市　田中多幸
算盤を妻が持ち出し逃げ支度

萬一を思う小金が貯らない　鳥取市　藤本鎮也
したいことやれと親父は信じきり

思想まで変って来る程金を溜め　米子市　源氏勝久
秘め抜いた悲しみ砂丘へ埋めに出る

おとなえば木犀薫り友は留守　鳥取市　河村忠志
ボーナスへヤレ福引の割引の

注いだ酒やめたと云って寝酒飲み　鳥取市　福山貴恵
御所車牛のろのろと京の秋

仲よしも何時かは変る金と色　大阪市　藤田頂留子
気が合えば牛は牛づれ等と云い

叡山に登れば高く耳遠く　大阪市　柳生柳生
冬来ればぜんそく先にやって来る

無精髭剃ると見違う良い男　大阪市　西口漁人
今日からはカナリヤ家族の位置を占め

寂光浄土バスが都塵を連れてくる　大阪市　休庭一休

大阪市　花田繁子
大阪市　木村久子
大阪市　鈴木生仏
大阪市　今井隼人
大阪市　斎藤三十四
藤井寺市　田中庸晃

初歩教室

題「蒸　発」

菊沢小松園

蒸発とは不安定な世相を背景にして生れた流行語のようなもので、殆んど本来の意味に使われた句は想像して居たように少なかった原因の判らぬ家出、行方不明、神隠し、こう言ったものとの同意語の様に詠んで居られるようである。それだけに摑え難かったのか扱い兼ねた句が遺憾ながら多かった。

蒸発として駐在も片づける　秋月
子へ残す想い蒸発思案する　千代
蒸発の勇気もなくて縄のれん　同
蒸発をフト考える年の暮　洋々
三億円蒸発一億総推理　葵水

①多い蒸発を駐在さんが安意に片附けたことへの皮肉か軽く一句にしただけのこと。②蒸発の決心を子への思いで踏切りが附かず悩んでいる、ありそうなことであってはならないことだ。③煩悩の犬追えども去らず酒に紛ぎらす弱い人間。④蒸発と年の暮あまりにも常套な思い附きの句で同想も多い。⑤漢字ばかりの時事吟で面白いが渡り方が足らぬので焦点が呆ける。

蒸発の勇気もなくて敷かれてる　鉄舟

薄暗い灯に蒸発の父を待ち　弘美
蒸発してやはり香水香は残し　光道
蒸発を子の泣き声が引き止める　孚彦
蒸発の一歩手前の言葉尻　誓二

①これも同巧が多かった、下五に変化を求めたのだろうがやはり浅い。②これは句境があまりにも暗いこの境地を掘り下げて一点の仄かな光明を与えてほしい。③面白い、これは本当の蒸発を扱っているが、内容はやはり好い人は去っても後に何となく和やかさ良さを感じさせてくれると判じたい佳句。④悲劇の舞台雪の中の宗五郎住いの場か、併しこの方は暗さの中に一片の光りはある。⑤中七に危ないながら生活への縋りへ最後にならぬよう懸命の努力を言葉の遣り取りに迄気を使っている様子が見える。

蒸発のいまさら出来る齢かいな　利美
蒸発の水都の川が道になり　初甫

責任は補佐が背負って蒸発し　すき
蒸発をしたい夜もあり縄のれん　瑞枝
穴を掘る手間も省いて蒸発し　光枝

①真剣勝負をさつと身をかわしたような句、軽味のある面白い句になった。②やや難渋、一寸迷う句川の埋立を蒸発と見た時世の変遷を十七字に纒めた処さすがと言いたい。③隠れた美談で犯罪の匂いもする新聞記事からでも思い附いたような句。④類想の多いので損な句、この句主ならもっとした句が出来る。⑤此処まで来るとユーモアと違ったものを感じる、むしろ人間の味気なさに触れる好ましいものではない。

蒸発の記事出稼ぎの子を案じ　秋女
蒸発も一張羅にする気の若さ　近江
蒸発の勇気もなくて宮勤え　孜孝
蒸発して零からやりたいことばかり　白汀
蒸発の一歩手前で踏みこたえ　同

雅号ぶっちゃけばなし（54）

きくざわ　こしょうえん

菊沢小松園

短詩型文学に於ける寸鉄人を刺すの意は、川柳の妙味であり、山椒は小粒でヒリリと辛いと言われる。その山椒の胡椒と、当時その画風が好きだった上村松園画伯の文字を借り、やや小粒の小を加えて出来たのがこの小松園、造園業と間違われたこともあったが商売は似ても似つかぬ堅い商売、故路郎先生からも苗字とよく合ったいい雅号だと褒めて頂いたことを覚えている。昭和二年以来この愛用の名に恥じないよい句を残したいものと常に念頭に置いて努力はしているが、なかなか未だに日昏れて路遠しで、心許ない限りではあるが鈍骨に鞭打って生涯を掛けた努力は続けて行くつもりはしている。

（金網商・明治37年生）

①苦労性な親ごころを捕えた句、誰しも思い附く句は損だ。②若さの矛盾を突いて面白いがそれが若さと言うものかも知れない。③下五の句語は古い今の若い人達には判り難くい④ふと思いついただけで底の浅いものに終った上手の手から水が洩れたか。⑤中七で句境が鮮かになって一句を確実なものにした。

蒸発とだけでは警察受附けず　保夫
潤いが蒸発もさせず働かせ　吐痴男
雫さえ落さず三億蒸発し　静子
心配をよそに蒸発まい戻り　軒太楼
蒸発へ話ついたと友の智恵　同

①強調して言ったのであって家出は保安の係で受附てはいるが捜査係まで働いては呉れないとの意、事情に明るい作者に感心する。②世間に関せず円満な家庭を他人の眼の冷さがこの句を創造させた皮肉な句材をよくこなしている。③よく出来た時事吟、上五の比喩が殊によいので無理ない句になった。④単調に扱い過ぎて底が浅い、あり振れた着想に終った。⑤技巧が過ぎて作為の痕が見えてわざとらしい下五の扱い方に難があるのではないのか。

一思いに蒸発したい恋を抱き　芳子
蒸発は噂の消える間だけ　正朗
蒸発のママを尋ねる記事になり　茂美
蒸発が記憶喪失して帰り　綾女
出稼ぎがそのまま蒸発してしまい　肖二

①少女趣味のあまりにも奇麗事に過ぎた感じ絵葉書の美人を見ているようで押しが足らない。②蒸発するには余程の深刻な事情がある筈なのに七十五日の辛抱とは軽う片附けられ過ぎては居まいだろうか。③中七に家庭も窺えて句の内容に引き入れられる、子供の狼狽振りや四囲の人々の騒ぎなども想像されて深刻なものを感じさせる。④これは一片の報告に終った残念ながら後に何もない。⑤この種の句も多かった、誰しも思う処は誰でも作る句ではなかろうか。

父ちゃんを蒸発させた都会の灯　輝親
蒸発はむかしもあった「父帰る」　静観堂
本当のこころはすぐに蒸発し　美代
蒸発をしたろと思うも年の暮　比呂路
ずぶ濡れになって蒸発の猫帰えり　天人

①出稼ぎと断らなくても判るし下五で歓楽街女と発展させて蒸発の過程の筋を追わしているよく纏めたよい句。②菊地寛の父帰るを取り上げられた句主の年輪に触れる、面白い。③人間誰しも蒸発したいような難かしい事によく出合うものだが理智の力で押えて居る。この心境を句にしたのだろうもやもやしたものだけを蒸発させてしまえば楽しい生活だけが残こるのだが。④これもよくあった今の時期の所為でもあるがあまりにも平凡。⑤動物の蒸発は少なかった何んな処にも句材はあると啓発される句だ。

★

十字架を背負い真逆さまに蒸発す　選者吟
蒸発も罪の意識は遁げ切れず　同

★

二月二十日締切・四月号発表
題「**誘**」
三月二十日締切・五月号発表
題「純」
宛先〒711倉敷市下津井三五二
本田恵二朗

★

四十一年九月号から本年三月号まで、菊沢小松園氏に本欄をご担当ねがったが、小松園氏選を希望する〝近作柳樽〟の人々が相当数あり、四月号から本田恵二朗氏と交替することになりました。
（**編集部**）

雅号ぶっちゃけばなし（55）

くめお
はまだ

浜田久米雄

川柳を始めた頃、本名の太郎では色気がないような気がして考えた。それまで久米正雄の小説が好きでよく読んでいたので正をとって久米雄としたらと某人兄らに相談したところ、すっきりしてよかろうということになりこれにきめた。姓名学とやらから言うと本名より雅号の方がずっとよいそうで、それをよいことにしてずっと使っている。本名で勤めた国鉄は三十六年で終ったが川柳はことしで三十六年になる。川柳はまだまだつづくことであろうが、これは姓名学上から見た運勢がよいからであるかも知れない。

無職・五十九歳

迷信

岡崎祥月選

迷信の根拠はないとコンピューター　鶴丸
日本の鬼門に迷う西東　緑
迷信は恵方詣りも考える　いわを
迷信が喜怒哀楽のすきねらい　章雅
迷信の力で病気もちこたえ　与根一
迷信と知りつつ今日は回り道　隆子
笑っては見ても迷信気に掛り　洋々
明治と昭和迷信で議論する　公輔
迷信を信じたくなる不しあわせ　暁明
迷信をけなしやっぱり気にかかり　肖二
迷信に人の弱さを見せられる　綾女
迷信をくさしこよみをくって見る　政夫
迷信と知りつつおみくじひいてみる　英子
迷信を信じる人間の哀れ　旭峯
貰う方やる方大安選ばはり　礎山
迷信と思えど鬼門はさけておき　葉舟
迷信にこだわり良縁取り逃がし　素身郎
迷信も母の熱意で病い癒え　瑞枝
迷信をまことしやかに金にする　代仕男
迷信といっておれない子の入試　木魚
迷信と笑って済ます現代ッ子　一進
迷信を気にせず逆境はねかえし　白汀
三度目の正直三りんぼうと知り　葵水
おばあちゃんのまじないが効く孫の怪我　秋女
迷信が不運の隙間から這入り　藤波
迷信を否定したのが暦みる　軒太楼
迷信と思う心に妥協せず　克枝
迷信と知りつつ母の言葉聞き　誓二
子のために兎も角迷信信じとく　耕人
迷信を鼻で笑うもドライ過ぎ　どんたく
迷信を信じて祖母は達者なり　正朗
迷信を信じる年齢でもう定年　保夫
科学者もまだ迷信を断ち切れず　双楽
神様のお告げと迷信信じ込み　七面山

佳

人間の弱さ迷信捨て切れず　弘朗
人生の終着にまである迷信　一治
迷信と知りつつ家風にさからえず　トク子
迷信も信じたくなる不幸　孜孝
易などに迷う明治を孫笑い　勝子
迷信へ母くよくよと苦労性　芳子

人

まアねと言って迷信なお信じ　十九平

地

どん底でふと迷信に突き当たり　里風

天

迷信にさからうまいと狭く生き　恵二朗

軸

迷信にまどわされない楽天家

川柳塔柳箋
一冊 六五円　送料 三五円

犬

山本素郎選

犬避けた廻り道にも犬が居り　近江
女一人噂の中で犬と住み　鶴丸
スピッツが善悪見境いなく吠える　魚水
風の子と一諸に犬も写される　与根一
脱線が隣りの犬に叱られる　一治
明けても暮れても名犬保存食練られ　章雅
片っぽの靴犬小屋にある平和　里風
初免許犬にハンドル脅かされ　十九平
保険屋へしっぽを振ったのを叱り　可住
犬離しても飼い主のそばにいる　暁明
犬の智恵ボール二つをもてあまし　肖二
カーラッシュ犬も危険を感じとり　古心
阿呆なのか何べん来ても吠えかかり　雅子
野良犬の尻尾振るすべ忘れかけ　恵二朗
三文の徳で掃いてる犬の糞　孜孝
駅までは警察犬も知っている　品充

見えぬ目に仔犬撫でてるよい笑顔　礎山
驚いた声より犬の方が逃げ　征山
仰向けに示した犬の無抵抗　無聖
犬の喧嘩までも社宅は気をつかい　素身郎
散歩道犬心得て先をゆく　代仕男
月賦さえくれず大きな犬を飼い　木魚
へべれけへ野良犬妙な親近感　白汀
犬をまず賞めて反応ありと見る　克枝
呼鈴の手より番犬先きに吠え　黒天子
チンチンをさせて何ンにもしてやらず　百水
美容院出る犬様のピンカール　芳仙
番犬もいらぬ世帯の気の軽さ　双楽
番犬に負けてセールスマンが去に　洋々
人相の良さ番犬も騙される　洋々
配達の苦労話に犬があり　秀峰
新米は犬の住居も教えられ　秀峰

佳

駈け出した迅さで戻る犬の足　一治
結局は母へ回ったポチの世話　一雲
つながれて鎖の長さだけを吠え　里風
畸形かと思えば犬の貴族なり　輝親
僕の飯へらして犬を飼うと言う　秋女

人

掘り返す犬の記憶の勘違い　宵明

地

飼い犬のなぶられてても一途な眸　百水

天

セパードへ雑犬胸を張って行く　どんたく

軸

プロレスを静かにみてるお犬さま

新車

伊藤茶仏選

正月の歌舞伎へ新車乗りつける　宵明
駐車場へ新車は軽い音でくる　魚山
オズオズとラッシュの中にある新車　鶴声
新車買ってだんだん地図に強くなり　初甫
新車への夢が子供をよう生まず　可住
カーマニヤ新車のデーターみな覚え　十九平
新車買いそれから心配ふえる母　政夫
やっと新車購えばモデルチェンジされ　吐痴男
保育所に預け新車は社に向い　旭峯
老母には勝てず新車をあきらめる　柳子
飲むつもり今日は新車を置いて行き　洋々
百姓を継ぐから新車買えと云う　古心
当分は新車撫でたりさすったり　輝親
新車乗りまわして大晦日家に居ず　光道
自動車ショー溜息だけをして帰り　孜孝
賃上げのデモへ新車で乗りつける　露声
とりあえず元牛小屋に新車入れ　素身郎
披露宴新車ばかりが来るホテル　代仕男
税金と睨み合せて新車買い　故佐保蘭
新車でも軽では無理な山に住み　不二
少うしの汚点も気にするのが新車　一進
2DKに住んで新車を乗り廻し　白汀
新車買えた程ポンコツ食っちまい　百水
タクシーの新車気嫌な靴で乗り　百水
棟梁が社長になって新車で来　虎城
タクシーの新車高いよに思い　葵水
煙草一つ買うのへ新車のり廻し　秋女
下取りのよい値にほれて買うと決め　誓二
新車には勿体ないよな客が乗り　保夫
通学へニューの自転車胸を張り　佳女
お隣も新車買うたと耳に蛸　双楽
おろしたてのハンドル胸を張っている　恵二朗

佳

ベテランは新車の癖をもう見抜き　洋々
縁のない新車へ師走の足停める　トク子
新車まだ主人の癖が飲みこめず　どんたく
日曜日家中で新車拭いたはる　弘生
泥跳ねて行った新車へバカヤロー　芳子

人

新妻のように新車の持つ固さ　白汀

地

家族五人のれると新車買わせる気　勝久

天

新車の名子供がみんな知っている　恵子

軸

接待の今日もゴルフに行く新車

第二百十一回（四十四年度第一回）
大萬川柳
「人違い」
入選発表

選　者　清水白柳
投句総数　七百二十句
入　選　六十八句

高石　好郎
奥さんとやっとわかってきた玄関
神戸　どんたく
その人に似し髪型へ立ち止り
大阪　小路
喉元で名が引っかかる人違い
大阪　静波
人違いだったか手前の駅で降り
八尾　千歩
亡父に似し人に又逢う戎橋
大阪　凡九郎
プライバシー聞いてしもうた人違い
丸亀　柚蘭坊
人違いされた写真を見せられる
大阪　史好
看護婦の私服人違いかと思い
美弥　弘道
人違いですと噂へむきになり
大阪　薫風
しまい湯の首は動かぬ人違い
大阪　阿茶

受付けが人違いした女客
大阪　保夫
人違いまさか出世はしていまい
堺　天笑
物騒な顔が振り向く人違い
大阪　慶之助
貫録のある方へ頭を下げちまい
富田林　花梢
人違いして道連れとなる夜道
大阪　痴男
お人違いでしょうと拗ねて惹いている
東大阪　生長
やり口が似ているだけで疑ぐられ
岡山　十九平
二人しか居ない子の名を呼び違え
尼崎　慶彦
人違いだけを信じて遺族発つ
郡山　孚彦
それにしても似ていた人を振り返える
大阪　弘生
列んだら団体折を呉れはった

笠岡　忠三
人違いですよ悪友口そろえ
尼崎　利美
そういえばちぐはぐだった電話口
和歌山　虎城
マスクまで外してくれた人違い
平田　代仕男
熱弁に人違いでしようを云いそびれ
倉敷　恵二朗
えらい肥えはったなと間違われ
広島　露声
警察で笑って済んだ人違い
松江　与根一
声呑んでよう似た人もあったもの
倉敷　千翁
約束へ彼女が来ずに親が来た
大阪　旅風
近づいて笑顔を消した人違い
堺　素郎
サインして呉れと誰かにまちがわれ
大阪　小松園
人違いいきなり肩を寄せられる
このままで居たいと思う人違い
倉敷　素身郎
人が違うようホステスの昼の顔
人違いではない和服で来た彼女
岐阜　鱗魚
出張のはずの夫によく似てる
人違いだったが屋台気が揃い
倉敷　里風
人違いもしやと思う旅ひとり

人違い尾行をされている無気味
大阪　大吉
警察は人違いでも叱っとき
仲裁が先ず殴られた人違い
大阪　形水
税務署と間違えられて苦笑する
人違いされてロビーへ呼び出され
西宮　多久志
えらい事云うてしもうた人違い
電話口息子と間違えてるらしい
大阪　濁水
呼び止めて他人の忘れ物渡し
恋人の手と間違えた立見席
岡山　秋月
煙草の火借りる手もあり人違い
お人違いでしやろと女そっけない
堺　青香

ためらいを察して名刺出してくれ
人違い弁解もせずもてている
人違い念じて急ぐ事故現場　大阪　柳志
産院のミスは他人の子を抱かせ
人違いらしい電話へ耳を替え
夕刊で死なせ朝刊で取り消され
人違いへ恥をかかさぬ受け応え　米子　千代
人違いされてそれから覚えられ
戦友と声が似ていて振り返り
人違いでもよし美人に会釈され
まさかあの人がと噂否認する
佳句　大阪　史好

人違いやろと浮気をとぼけてる　大洲　暁明
喋らせておいて私じゃありません　八尾　鬼遊
間違って呼べば向うも返事する　笠岡　真奇
久し振り話せば僕は弟です　大阪　水客
気易うに人の名前で握手され
人ノ句　岡山　秋月
人違いでしたと眼鏡ふいてみせ
地ノ句　大阪　文秋
会釈返したらうしろの人だった
天ノ句　大阪　文秋
人違いされ姉さんの恋を知り

選者吟
意気込んで来て替え玉にあきらめる

大萬川柳四十四年度第一回ベストテン（一月現在）

一	**文秋**	七、〇	大阪
二	**秋月**	四、〇	岡山
三	**千代**	四、〇	米子
四	**柳志**	四、〇	大阪
五	**青香**	三、〇	堺
六	**史好**	二、五	大阪
七	**濁水**	二、〇	大阪
八	**多久志**	二、〇	西宮
九	**形水**	二、〇	大阪
十	**大吉**	二、〇	倉敷
十一	里風	二、〇	大阪
十二	鱗魚	二、〇	岐阜
十三	素身郎	二、〇	倉敷
十四	小松園	二、〇	大阪
十五	水客	一、五	大阪
十六	真奇	一、五	笠岡
十七	鬼遊	一、五	八尾
十八	暁明	一、五	大洲

（以下略）

昭和四十四年度第三回
「誕生」　五句以内
締切　二月二十日

第四回
「時刻表」　五句以内
締切　三月二十日

投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五—六
郵便番号　五九二
川村好郎

雅号ぶっちゃけばなし（59）

よしろう
かわむら
川村好郎

好郎（よしろう）は私の本名です。路郎先生にいい雅号をとお願いしたが考えておこうと仰言ったまま数カ月経った。もう一度申上げたら、路郎の郎が本名にあるし、そのままでよいではないかと言われたので好郎は先生から頂いた雅号のつもりで今日まで通している。「こうろう」と読んでくれる人が、たまにあるが本名と雅号と同じなのは表札も一枚でよいし、手紙などにも使い分けすることも要らない。しかも生みの親と川柳の教えの親から貰った名だから大事に、両親を忘れぬようにと思っている。

（会社員六十五歳）

第16回大萬川柳大会

日時　2月23日・12時半
会場　大　萬　（故松江梅里宅）

兼題「代がわり」千代選・「意志」柳志選・「素顔」素身郎選「好奇心」好郎選・「注文」文秋選・「水」水客選「吸物」吸江選・
＊投句のみの方は百円封入（句集代を含む）二月二十日までに好郎宅へ送ってください。（各題三句以内）
＊席題三題当日発表。

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。
（橘高薫風・担当）

若柳潮花氏の舞姿

▼麻生葭乃先生は旧臘二十九日腹部に激痛を覚えられ即日入院、盲腸炎の手術を受けられた。一月六日退院経過は順調で養生に専一しておられる。

▼川上三太郎先生の葬儀は一月十八日午後一時から東京中野の宝仙寺で営まれ、柳人多数が参集、冥福をお祈り申し上げた。戒名は文徳院徹心三宝居士。本社から中島生々庵、小石主幹夫妻と薫風が上京した。存続に決定した「川柳研究」誌の発展をお祈りします。

▼田中蛙眠子氏（鳥取同人）は住居の改築、息女の卒業と就職、勤務異動、小学校統合、新校舎建築その他一般的行政企画からご老父の入院などで昨年は公私共に忙殺された由。

▼池田古心氏（岡山同人）が主宰する〝かゞみ川柳社〟が県下川柳グループ賞を獲得された。通巻一八二号発行。

▼川岡霊眼子氏（諫早市同人）は山本五十六と鶴島正子伝を執筆。東洋のネルソン提督とハミルトン夫人のロマンスに似た二人の伝記とのこと。

▼若本多久志氏（本社副理事長）は西宮から三百キロの勝浦へ老アベックでドライブ。勝浦温泉でご夫妻仲よく新春を迎えられ―熊野路の旅もはるけき老二人―多久志。

▼清水白柳氏（大阪理事）一月三日紀州橋本の紀の川荘へ、親族一同総勢二十人で一泊、楽しい新春だった由。

▼東野大八氏（美濃加茂市）は二週間で普通新聞の十八ページ分を一人で書き、親指にゴムバンドをつけてガン張られたそうで、伊東ゆかりのうたではないが〝きのうかいたオヤユビがイタイ……〟と。

▼黒田紅樹氏（大阪市）は一月三日逝去。告別式に清水白柳氏と後藤梅志氏ほか参列。

▼村田瓢太氏（守口同人）の長女多江子さんは二月二日、厚生年金会館式場で華燭の典を挙げられた。

▼後藤梅志氏（本社参事）は五年前手術されたが、そのときの主治医が来阪して語られたところ、当時は実はガンだったそうである。それを聞いた梅志氏は愕然とされたが、これでガンの心配はこんごともにないとのことでそのよろこびも大きかった由。

▼土佐市民会館落成祝賀協賛川柳大会が三月二日正午から土佐市高岡町、土佐市民会館で開催。兼題、文化・不倫・抵抗・父・夢。不参投句は二月二十八日までに百円同封。

▼第一回青森県川柳年度賞は、後藤柳允氏（黒石市）が受賞、作品の優秀と「ねぶた」編集の功績をたたえられた。惜しくも選を逸したものの、奥昭二、高田寄生木、石沢三善諸氏の作品は充実していて、青森県柳界の高いレベルを感じさせた。同賞の候補推薦委員に工藤木村涼人、選衡委員に工藤安亭の両川柳塔同人が参加されている。

▼西塚春魚氏（八戸市）が八戸市文化賞を十一月三日受賞され、黒石市の褒賞に黒石川柳社が表彰された。明治四十四年から川柳の灯を守り続けた功が認められたもの。

▼「噴煙」十一月号は甲斐田桜里追悼号として昭和四十三年十一月五日発行された。

▼河相すゝむ追悼川柳大会は十二月十五日西宮商工会館で開催され、京阪神をはじめ遠く東京、倉敷からの参会者もあり八十名の出席二十名の投句で、和やかなうちに故人を偲んだ。

▼岐阜川柳社設立並に柳宴創刊十五周年記念川柳大会は昭和四十四年一月十五日（祭）午前十時から岐阜市神田町四丁目日の丸会館三階大ホールで開催。

▼柳都新春川柳大会は一月

美しい心
美しい花
富田林　公栄社(07212) 2064

十二日午前十時から新津市本町二老人憩の家で開催。藤井比呂夢・横村実・大野風太郎三氏が、一人二十分ずつ川柳についての所信を発表、鶏の題で六選者へ二句ずつ（同一句を禁ず）出句するなど新しい企画が盛られている。

▼第六回三重川柳大会の知事賞には、「子にモラル説く晩酌のさめぬ間に」小松原爽介（西宮）大宮司賞には、「とんとんと良いお日柄の使者となり」福島郁三（西宮）県議長賞には「真球不況一途に少年期を脱す」中村土竜（津）県教育委員会賞には、「弁当二つ愛の比重をためすかに」小松原爽介（西宮）がそれぞれ受賞された。

▼第四回東伯町文化祭協賛山陰川柳大会作品集が、鳥取県東伯町美好、清水一保方から発行になった。大会成績総合一位に森田布堂氏（赤碕町）、二位、八木千代さん（米子市）、三位、川崎秋女さん（赤碕町）が受賞、それぞれ優勝杯、準優勝盾を獲得された。

▼水粉千翁氏（倉敷同人）編集の「川柳道場」は五十号記念に互選大賞作品を選定、全国二十四選者の推薦のうち、四選者の一席と一選者の三席を得た句「ある敵意少女鉛筆尖らせる」桑野林鶴が大賞を獲得した。準大賞は「敵になるかも知れない肩を抱いている」渡辺しげ子。また、運営を委員制に改組して五十一回へと出発することになった。委員は小幡里風、渡辺貴志朗、本田八笑人、桑野林鶴水粉千翁の諸氏。

新同人紹介

坂井三葉
—久志良・白柳推薦

横倉富久一
—春巣・白柳推薦

▼第八回（昭和四十三年度）平安賞作家が、西山寛子（岡山県）岩村憲治（京都市）と発表になった。「凍てつきし会話へ燃えるストーブよ」寛子「笑いあるか父の影から水盗み」憲治の句を含めそれぞれ十句が対照になっている。併し両者とも、選衡委員の推賞している句、例えば「胎動のたしかさみどり日々増しぬ―寛子」「影絵の犬ひとつ哭かせている家族―憲治」の句など抽出していないのが多いのは、作家そのものが選衡の対照になっているのだろうか。

▼石原青竜刀氏（東京都）は「川柳しなの」誌九月号に「賞というものについて」―「川柳塔」の二賞に感じたこと―と題して川柳時評を書いておられる。

▼島川柳会（岐阜市）の年忘れ句会は十二月二十一日開催。

▼ひらない忘年句会（青森県）は十二月十五日工藤安亭居で開催。

▼岡鉄川柳会忘年句会（岡山市）は十二月十四日岡鉄クラブで。

▼備前川柳社忘年句会（岡山県）は十二月十五日芳月居で開催。

▼たましま新春句会（倉敷市）は一月五日戸島神社桑野林鶴居で開催。

▼本田恵二朗氏（本社参事）が、四月号から「初歩教室」を担当されることになった。菊沢小松園氏には長い間のご苦労を謝し、恵二朗氏には独自の筆致で新人養成にご努力願うことよろしくお願いします。

▼吉田水車氏（名古屋市同人）から、「わが川柳塔誌も昭和四十四年一月号でめでたく四十号になるが、川柳雑誌から通巻すると実に五百号になるので、ナンバーを通巻とするよう、ご検討願いたいと。

▼福田丁路氏（高槻同人）は十二月二十三日城崎温泉から玄武洞へ「観光のブームに喘ぐ玄武洞―丁路」

▼賀本昇氏（大阪同人）の夫人が十二月十八日逝去、謹悼。

▼那谷光郎氏（加賀市元同人）は一年二カ月の病臥療養もむなしく十二月十日午前零時五分死去された。氏は九州帝国大学医学部出身で開業医として活躍。川柳も野村味平氏とともに、川雑大聖寺支部の草分けで病臥中も川柳の話題は絶やされずにいたという。行年七十四歳、謹悼。

▼後藤閑人著、句集「あしあと」が昭和四十三年十月一日仙台市東八番丁一七〇川柳宮城野社から発行になった。（定価六百円）

▼小川静観堂氏（伊丹市同人）は一月八日飲み過ぎからころび、胸椎横骨打兼頭部挫創のため絶対安静とのこと。また令夫人は十日に逝去された。謹悼。

雅号ぶっちゃけばなし (57)

しずま
そばじま

傍島静馬

自分ですらそう思っているくらいだから、ひとが雅号ですかと問うのはあたりまえだと思っている。しかしこれは、いまは亡きおやじが苦心の末良いと思って村役場に届けた正真正銘の本名なのである。

多産系だったらしく兄妹七人、和一、省三、司郎などいずれももっともらしい名を貰っているのに、自分だけがどうして仲間外れのような馬の字をくっつけられたのか、いまだに疑問が解けないが、或はこれはおやじが息子の将来を見越し川柳の雅号兼用として付けておいてくれたのかとも思ったりしている。

（無職　明治三十三年生）

本社 新春句会

会場　以和貴荘
九日　午後六時

はばたく年―四四年の新春句会が、阿倍野橋の以和貴荘ではなばなしく開催された。「うーむ、これは豪華版だ」と、出席者の誰もが口にした会場美の第一声である。

生々庵主幹の柳話は、ことしの年賀葉書が全郵政局をあわてさせた番号の珍事。新聞社までスワ特種と色めき立ったほどの偶然を柳話に結んだ興味あるものだった。

全出席十七氏の筆頭は、なんといっても十六年全出席の傍島静馬氏が光った。四三年度の月間賞杯永久保持は、最後まで一三夫氏と競り合ったが、藤岡花梢さんが堂々の栄誉をになわれた。それらの賞状に（滋雀氏筆）生々庵主幹染筆の色紙が贈られた。なお一月の月間賞は阿万万的氏だった。

（庸佑整理）

出席―与呂志・梅志・一三夫・笑痴・綾女・柳宏子・天笑・弓彦・古方・滋雀・柳志・瓢太・鳥荘・誓二・一栄・勝晴・白柳・美代・花梢・生々庵・形水・宏子・いさむ・野迷路・好郎・鬼遊・静馬・貞山・一舟・千葉・しげお・トメ子・金三・葛城・富久一・大吉・吸江・柳太・吉太郎・鶴声・静歩・つき子・芙巳代・凡九郎・摩天郎・儀一・清人・栞・宣介・恒明・日出雄・肖二・凡吉・弥生・亜成・季賛・小松園・あいき・万的・千梢・功雄・庸佑・葉子

席題「トランプ」　阿部柳太選

奇術師のタマゴはトランプから習い　一三夫
眠られぬ夜をカードに聞いてみる　笑痴
トランプで占う豪華な孤独なり　弓彦
ジョーカーに爪跡あるを見抜かれる　吸江
七並べいじわるするこつもうおぼえ　凡吉
トランプを他に老父母餅を焼き　金三
トランプで鬼を持たされ奢らされ　トメ子
トランプを手際よく切る紅い爪　勝晴
占うたトランプの目に嘘があり　葛城
トランプが切符で子供の汽車あそび　儀一
末っ子が勝ってトランプ賑やかな　千葉
罪もないトランプ占い投げ飛ばし　生々庵
トランプへ母は古風なおまじない　清人
手品師のトランプ生きてるよに動き　与呂志
ババ抜きをするしかトランプ知らんのや　恒明
トランプ占い今年金運ないと出る　恒明
いどまれたトランプ幼児にひけをとり　しげお
トランプで飯食う人のモーニング　摩天郎
うらないのスペードの女王邪魔してる　つき子
結ばれる恋のトランプ派手に切り　静歩
仲直りするトランプで又もめる　花梢
山行きのトランプ安い方にする　古方
トランプに倦きたかおやつねだりに来　誓二
バーの妓がトランプしてるひまな宵　いさむ
トランプの指を子供に見ぬかれる　柳志
トランプで失恋やっぱりそうか知ら　天笑
逢いたさがつのるトランプまだつづけ　好郎
トランプの手品急所で見破られ　野迷路
山高の中からハートひねり出し　摩天郎
トランプに負けてやるコツ姉が知り　与呂志
ジョーカーが来たトランプの目の動き　梅志
トランプの最後のエース持てあまし　柳太

席題「失神」　本多柳志選

名曲へ失神どころか寝てしまい　好郎

失神も乳房で意識取り戻し　千葉
学業をさぼり失神しに出かけ　冨久一
失神も若さ溢れるエネルギー　柳宏子
失神をするにゃ雑念ありすぎる　凡九郎
付き添えが先きに失神した手術　一三夫
失神をしたのが自慢十七歳　清人
山の魅力失神したのをもう忘れ　吸江
失神をたのしんでいるかぶりつき　天笑
失神者出してプロレス人気が出　形水
失神が覚めて見下ろす目と出合い　滋雀
親の脛かじって失神して帰り　弓彦
失神をしてから看護婦思いきり　宏子
演出という失神に乗せられる　恒明
失神も度重なればほっとかれ　綾女
失神へレフリー無情な秒を読み　清人
失神の夫へ妻が百度石　儀一
失神でこんな美人に世話をかけ　野迷路
失神のさわぎで人気盛りあがる　花梢
失神を売り物にしてかせいで居る　恒明
唇を預けたままで失神す　形水
失神が記事になる日の市内版　白柳
失神をしても離さぬプログラム　滋雀
失神をして優勝のゴールイン　柳志

席題「羽ばたき」　岡橋宣介選

酉年と知らず羽ばたく庭の隅　弓彦
ハネムーン羽ばたくように羽田発つ　吸江
羽ばたいて呉れる子供を待ちあぐみ　金三
親元を離れ羽搏く陽がまぶし　柳宏子
羽ばたいて大空は見ず家鴨の子　芙巳代
羽ばたいて鶏逃げる道が無し　富久一
にわとりのはばたき今日の空にする　笑痴
羽ばたいて神代恋しいカゴの鶏　富久一
羽ばたきをしてから鶴は歩を運び　綾女
派手に羽ばたき孔雀足どり静かなり　生々庵
羽ばたきをしただけの孔雀を見て帰り　柳太
刻つくるだけのはばたきとはなりぬ　栞
はばたいて見てもやっぱり籠の鳥　笑痴
羽ばたきの姿剝製佇ちつくし　滋雀
羽ばたいているなと賀状みつめられ　宏子
双翼いっぱい巌頭の鷲壮かん　一三夫
一番鶏を聞いてしまった初夜でした　宣介

雅号ぶっちゃけばなし（58）

大坂（おおさか）形水（けいすい）

昭和十年頃？「羊」という店内誌を亜鈍君等と発行し、川柳、俳句、雑文等を店外からも募集、自分も幼稚なものを得々と書いたものである。そんな時、難波の書店で川柳雑誌を手にしたのが投句の始まりである。始めのうちは本名の正一郎の郎を取っただけの「正一」だったが亜鈍が、藤村青一を「高鷲亜鈍」にしたので、俺も一つ……と、いうようなことで、おふくろに背中を流してもらった子供の頃の行水を想い、行水をもじって少し新味を出すつもりで「形水」としたのである。

（紳士服製造卸　六十歳）

兼題「書き初め」　川村好郎選

御ひいきの所望書初めする楽屋　章雅
書き初めもグループサウンズ聞きながら　弓彦
親のない子の書初めが見上げられ　小松園
書き初めへ教育ママの手も入り　滋雀
書き初めに好きな初音の鳥も添え　貞山
書きぞめに決意あふれる墨の色　静馬
書初めは去年と同じ禁酒書く　美代
書き初めに馬齢重ねた感新た　肖二
書き初めを兼ねて賀状の返事書き　肖二
書き初めの墨の香りも新春のもの　栞
書き初めの寿書き直し書き直し　一三夫
書き初めに老眼かけたりはずしたり　弓彦
書き初めを褒め年玉をせびられる　綾女
宿題の書き初めどれだそうどれだそう　栞
はみ出した字もある孫のお書き初め　柳宏子
弔吟が書初めになり寝正月　千葉
書き初めの手を洗わせる餅が焼け　鬼遊
学校へ出す書き初めは暮に出来　虎城
書き初めで自分を叱る座右銘　千葉
書き初めに屠蘇の気嫌がまだ残り　誓二
初風呂のほてりの中で墨をする　古方
書き初めにまだ衰えぬ古稀の春　生々庵
書き初めは外孫にもやるお年玉　好郎

兼題「銚子」　後藤梅志選

銚子みな討死をして歌となり　どんたく

一本の銚子は注いでゆく女将　旅風
お銚子が二本乗ってる旅の膳　鶴声
勘定書銚子の数が腑に落ちず　章雅
銚子来て仲居の愚痴も聞いてやる　虎城
もう一本たのむ銚子の低姿勢　どんたく
飲みそうなとこへ銚子が寄ってくる　文秋
銚子ならべて目出度い話まとまりそう　美代
一本の銚子子が注ぎ孫が注ぎ　花梢
空銚子さげてきわどい踊りする　万的
お銚子がエレベーターで来る宴会　阿茶
社用族銚子の数は気にしてず　いさむ
飲めば出る校歌へ銚子果てしなく　宏子
挨拶が済んで銚子がなだれ込み　天笑

近詠

大洲市　**米沢暁明**

帰る人帰り過疎地を初春にする
てんぷらにすると鰯と見えぬ皿

今治市　**月原宵明**

混むバスで意外女の押す力
いよ絣蜜柑娘はよい器量

和歌山市　**秋月宏方**

わが過去は秘めて教育ママ厳し
内職の話女湯ひまがいり

名古屋市　**長谷川鮮山**

深呼吸胃の腑かすかに音がする
怒られる理由さらさらない不審

雅号ぶっちゃけばなし（59）

さぶつ　いとう

伊藤茶仏

雅号が活字になる感じと、雅名で呼ばれる場合に、自分の意図と違った呼び方をされると抵抗を感じますので、別号「思茶郎」を、しげろうと呼ばずに、しかいろうと呼ばれたり、茶仏をさぶつと呼ばないで、ちゃぶつと呼ばれると気になります。神経質かいな！

茶仏の雅号は民謡を作っていた頃、野口雨情先生から名づけて貰いました。戦後からだと思いますが、川柳での思茶郎を、茶仏に変えて今日に至っています。私は苦学時代の習慣で、よく番茶を飲みます。だから茶仏でしょう。本名は伊藤繁之、柳歴四十年も余暇を社会福祉に忙殺され、不勉強で申し訳ないことです。

（会社役員　明治三十七年生）

上座から来るお銚子へかしこまり　柳太
お銚子が来んと末席むくれ出し　誓二
気の利いた銚子真似だけ酌いでくれ　形水
夢のない顔が銚子の数を空け　小松園
ホルモン焼銚子も油じみた色　万的
酒癖が重い銚子を捜して来　笑痴
銀行へ社長銚子を手離さず　好郎
お銚子を女将が持てば他愛なし　栞
酔いつぶれてもお銚子の数は知り　日出雄
お銚子に制限がなし三カ日　清人
倒された銚子に幹事気を使い　与呂志
おながれを貰い銚子へあらたまり　天笑
銚子持つなれぬ手付きが客に持て　一舟
銚子持ち飲まぬ幹事が酌ぎまわり　いさむ
団体へ銚子四五本雲がくれ　清人
ぜひ今日は聞きたい言葉待つ銚子　富久一
子を抱いて妻はぎっちょでもつ銚子　花梢

隣席の空かぬ銚子が気にかかり　あいき
お一人に一本という味気なさ　白柳
下げてゆく銚子も一度振る幹事　葵水
秋深く地酒の銚子にある重み　万的
気のきかぬ男銚子をさげてくる　梅志

兼題「ゲスト」　**西尾栞選**

大臣をやめてゲストの口が減り　静馬
でしゃばりを今日ひっ込めているゲスト　天笑
教え子とゲストテレビで再会し　大吉
姉さんのゲスト意中の人らしい　つき子
覆面にされてゲストで出演し　いさむ
ゲストもうカメラを意識したポーズ　柳志
ゲストまで献血をする破目になり　小松園
ゲスト気分いまだに抜けぬ婿養子　野迷路
そのゲスト大物すぎて座が白らけ　一三夫
思い出の歌へゲストの眼がうるみ　宏子

ひしひしと落ち目が分かるゲスト席　弓彦
頭数だけにはるばる来たゲスト　花梢
ライバルの竣工ゲストにされて佇ち　滋雀
なまじっかゲストにされて酔えもせず　滋雀
母親をゲストにするも松の内　葛城
ゲストにも明治大正昭和の差　静歩
ちらほらと離婚話しもあるゲスト　烏荘
放送へゲストの恩師呼び出され　宏子
毒舌をゲストとしての身だしなみ　生々庵
ひょっこりと来たのをゲストにしてしまい　古方
サンタ役市長ゲストの保育園　葵水
毒舌で売ってゲストで幅が効き　柳太
紹介をしただけゲスト忘れられ　白柳
ゲストなり今日の服装どれにしよう　烏荘
視聴率これでもかいと言うゲスト　恒明
ゲストきよういぼじり巻きの顔でくる　梅志
討論へゲストにしとくうるさ型　好郎

名目はゲスト候補の後援会　章雅
茶の間のゲスト遠慮ないのがとりえ　季賛
お寒いゲストでもゲスト　古方
交際の広さゲストでうなずかれ　千葉
番組が飽かれゲストで間を持たせ　富久一
片仮名が多いゲストの帰朝談　宣介
ゲストの方が食って仕舞ったプログラム　瓢太
招かれてゲスト音痴の列に入り　柳太
初釜のゲストになって嫁さがし　一栄
先輩をゲストに迎えて懐古談　誓二
飛行機で来たと売れているゲスト　いさむ
上からの圧力かかっているゲスト　恒明
優勝の顔をゲストに買いに来る　吉太郎
人気番組のゲストをコンピューターが決め　万的
本日のゲストは飾らぬ国なまり　芙巳代
ゲスト今日教育勅語のことにふれ　栞

兼題「星」　清水白柳選

ほろ酔いが星を見つけて歌い出し　吸江
北極星だけ知ってるお親爺の星座学　柳太
星空を見上げて財布握りしめ　栞
星に愚痴告げて少しは気が和ごみ　公輔
七夕に星がいないと子に泣かれ　つき子
この次はどこの飯場か流れ星　好郎
スモッグの無い三が日の星すなお　与呂志
軽装を咎めに出たか山の星　天笑
叱られて星と話した幼い日　綾女
クリスマスの星倖せうすき手で作り　栞
紙の星綿で満足してる雪　阿茶
もう泣くまいどうせ朝には消える星　生々庵
終電に急ぐ日課で星も見ず　しげお
星屑と私が空車待っている　虎城
月も星も友達にして家なき子　宏子
練習船大の男が星に泣く　花梢
ふり出しに戻り気づいた星の数　滋雀
星空を話す二人は信じ合い　弓彦
星ほどの中からえらんだのがコレさい　一三夫
ひだりみぎ忘れはててる星月夜　古方
お別れをしてから怖い星の道　千葉
星空を見上げる髪の良い匂い　栞
ロケットよ早よ来い来いと星光る　吉太郎
言い負けて出れば一きわ光る星　千梢
すばらしい星だとおもう逢えた日は　小松園
言い勝って来た夜の星の冷めたさよ　一栄
星ばかり眺めて話し捗どらず　柳太
ひとり旅星に話してみとうなり　好郎
和やかな窓に凍った星がいる　葵水
星同士ささやいたままふりむかず　生々庵
我執秘めて夜明けの星が美しい　日出雄
何が飛ぼうが星座狂わない　好郎
帰途いそぐピエロに星のしずくする　勝晴
もう次の言葉が出ない星にじむ　花梢
肩に降る星少女は父を奪われて　芙巳代
星の私語耳をすませば聞こえそう　一栄
どの星にしようか父と母の星　白柳

雅号ぶっちゃけばなし (60)

まてんろう

やぎ

八木摩天郎

昭和六年二月毎晩のように路郎師と飲み歩いた若い日、今日もほろ酔いの足どり、先生雅号を、ヨッシャ、酒の上機嫌、ここで飲み直しや、堺宿院魚の棚の前、カフェー大学、カザリン摩天楼の赤い灯青い灯の前、摩天郎にしとけ、わしの郎をやる、早速やなア、君は脊が高い。市会に出ろ、市会より五階、摩天楼だ！旅人、私達福寿草、新川柳鑑賞と刊行に片棒をかつぐ。雑誌編集に路郎師と迷？コンビ……自他共に許す仲となろうとは。

（会社社長　六十六歳）

各地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

興奮がさめ言いすぎた胸うずく　滋雀
水筒のお茶へ日の丸溶けてゆき　静歩
あいづちについ口すべらした秘密　好郎
用心が過ぎて魅力のない若さ　弓彦
ひみつ洩れそうで神経すりへらし　文秋
興奮を若さの故にして宥め　金三
自分だけ知ってる秘密でしゃべりたい　柳宏子
婚約の指輪はめあう手がふるえ　あいき
団地みなひみつのようにドアを閉め　眉水
ギリギリに出かけ弁当置き忘れ　白柳
仲裁の方も興奮してしまい　形水
運転手だけが知ってる社長の秘　吸江
鍵重し持って母娘の城守る　富久一
用心してきましたんやと生き伸びる　古方
ひみつなら守ると質屋あいそ良し　誓二
ふところに合わせメニューひまがいり　君子
策つきてお手上げかくごする眠り　清禄
弁当を喰べると戻る幼稚園　小松園
貴重品疎開お手上げととのいぬ　千梢
素通りの郷里の駅弁だけは買い　智子
旅慣れて駅弁当の通となり　喜風
なじみ客メニューは女将に委しきり　双楽
さり気のう秘密かぎ出す聞き上手　静馬
母だけに打ち明けようと朝を待ち　千代
欠員の弁当を幹事持ち歩き　生長
本人の知らぬ秘密を医者握り　弘美
まっさきに弁当開く釣れぬ竿　章雅
ライバルの過去の秘密をさぐり出し　庸佑
家を出る順に弁当出来上り　葵水
興奮の中で冷たい記録の日　虎城

玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

仕かけたら止めておかれん屋根ぶしん　井平
羊かんの厚さを測る目が並び　鬼遊
のりかえて違う定期を見せて出た　一扇
のりかえを待ってるうちに気が変り　柳志
五十年もう乗り換えのきかぬ齢　静歩
鍵っ子の眼には淋しい流れ雲　肖二
再起する決意促す流れ雲　好郎
末っ子の結婚すました母のしわ　竹青
仲人口と知りつつ乗った嫁き遅れ　風仙洞
ようやくにあなたと云えハネムーン　はじめ
是が非でも結婚したいと駄々をこね　章雅
結婚のためにセッセと銭を貯め　誓二
結婚の日から姉妹の運不運　富久一
嫁がせて母より父が淋しがり　一栄
申込順に結婚話消え　虎城
オートメに似た神官で結ばれる　弓彦
神前で二人っ切りの式を挙げ　金三
同僚をあっと云わせた社内婚　柳宏子
放送に知人出る日の大騒ぎ　綾女
深夜放送女一人のグラス乾す　照一

高知川柳社（高知市）

川竹松風報

レコードを流し民放時間埋め　文秋
ジャンケンへ代表味方振り返り　葵水
代表でないから大きな口をきき　千歩
叱られにゆく代表をクジで決め　形水
代表権ない者勢沽にかりたてる　句念坊
羨望の眼に代表がかたくなり　白柳
花束に出る代表のこましゃくれ　六龍子
窓破ってノッポ代表で叱られる　静馬
代表に出た子の服に継があり　清子
私心なくした代表だった筈なのに　古方

旅行・宴会・リクリェーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本　社　東京都大田区蒲田4-40-5
TEL　03（733）6951

守口出張所　守口市京阪本通2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL　06（991）1181 内線 588

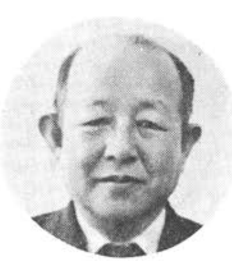
言訳のうそ良心にさいなまれ　柳水
死に際の良心先きに出しとくれ　句念坊
良心が呼んで見せてる秤の目　一二三
十円を届ける瞳にうそがなし　寛
良心に頼る路傍の無人市　たかし
議員の良心札束でたたかれる　松風
宝石をちりばめ良心忘れられ　窓花
やわ肌の饗応良心おぼれさせ　美知
腕白の良心わびる窓ガラス　勝子
浜木綿の匂いで遊ぶ子に育ち　伊津志
遊ばせる筈を迷子にしてしまい　武司
一人居て正視するラブシーン　伸
さとへ来て妻は娘としてあまえ　紘一郎
あなたの素顔が魅力ですところす　紅雨
腹いせに執行吏にもお茶を出し　竹青

昭和元禄酒と女に夜が更ける　竹荘
行列も終りに近い乱れ足　良友
天災が忘れぬうちにやってきた　みどり
淋しさをかくす父子の寄席を観る　夢迎

和気川柳会（岡山県）　藤原秋月報

おみこしの担ぎ手がない過疎地帯　貞子
萩の花新聞少年ふれて来る　繁子
祭酒無神論者も酔うている　秋月
破れ襖昔のニュースが覗いている　富士夫
お祭りも氏神様もない団地　胡風
投げ込まれ新聞土間で朝を待ち　艸平
何回も出てみる娘の祭客　渓泉
新聞の隅で家出の娘を尋ね　芳明
宮太鼓明治百年鳴り響き　梅泉
新聞に夢中の夫を睨みつけ　知水

雅号ぶっちゃけばなし（61）



こほう
戸田古方
とだ

生々庵氏に導かれて路郎門入門が昭和十三年。「こほう」を号にしたのは大正九年、中学三年生。番傘大田佳凡氏の令兄親友豊和氏と創作の真似をしていた時である。漢文で篷（ほう）という字を習い、舟の苫（とま）という意味が気に入って孤篷（こほう）とする。孤は独り子だったからだ。その孤篷著川柳二千六百年史を出版させて頂いたのが昭和十五年。戦後、路郎先生より蓬（ほう）ならまだしも篷（ほう）は印刷屋泣かせだ、難字を誇る時代でもない、というわけで古方と改名して頂く。当時も、今も、歴史を教授中。これで姓の戸田ともよく合う。いつのハガキか「古方戸田猶治郎」で出したら、「古様方戸田猶治郎様」と返事がきたのにはびっくり仰天した。**教師（64歳）**

唄が出たへんで盛られる祭ずし　一風楼
新聞が恨まれている生返事　伊久野
宵祭り当てのある子に誘われる　恭子

川柳たましま　水粉千翁報

心臓の強さ女性のものとなり　すま子
心臓の鼓動初恋かも知れず　郁恵
逢えばまた泣ける意外な曲り角　千翁
おめがねに叶い嬉しくにらまれる　扇水
ほどきものする針先も黄昏れる　三林坊
睨まれてからの男に素手がある　克枝
手術待つ妻へ秒針つきささり　旭峯
注射針カルテが知っている寿命　里風
婚約を告げる墓参の曼珠沙華　秀子
婚納へ春の歯車きしみ合い　澄子
婚納がすんで気になることを聞き　朝二

いずも川柳会（出雲市）　尼緑之助報

故郷発った意地旋盤にしがみつき　河南
全盛が使いこまれてからくずれ　舞吉
泣き言が効を奏した虚栄心　紫
泣き言も我が身に明日は返る年齢　美紗
大阪の旅片道は立ったまま　祥月
全盛も限界があり髷を切る　巡歩
片意地が独り養老院の秋　李朋
全盛の挨だこわびし養老院　独仙
全盛の頃の宅地に小さく住み　代仕男
独酌の又全盛の頃にふれ　千代
意地を張ることも覚えた三才児　千草
折返す飛沫へ声が涸れるまで　青湖
倦怠期女の意地の黙秘権　澄水
意地だけが男まさりの仕事させ　君江
細腕が子の成人に見せる意地　軒太楼

雅号ぶっちゃけばなし (62)

ぶんしゅう
かない
金井文秋

書籍商（五十七歳）

私の生まれたのが九月二日で秋、今の書店を初めたのが十月で秋だったので、店名を文秋堂と付けました。

川柳を作りかけたのはそれより三年前で、いろいろ考えたあげく串郎と付けました。それは字の形から見て二つの枠を貫くと云う仲々張切ったものでしたが、数年後戦争の拡大に伴ない句が面白くなり嫌気がさして川柳を捨てたのです。

それから十年カムバックした時、理由はどうあれ一度挫折した事だし二つの枠を貫く串郎の意味がなくなったので、素直に店名を取って文秋と名付けました。川柳を初めた時もカムバックの時も、やはり秋でした。

三つ四つ肩書を持つ全盛期　富貴子
往復を送り迎えの幼稚園　晃男
お互の損を承知の黙秘権　緑之助

川柳塔松江支部　岡崎祥月報

とんちんかん迷子巡査をてこずらせ　巡歩
あわて者とんちんかんな申し立て　唖蝉
毒舌を吐いて空しいことしきり　光春
叩く手をかばってくれた祖母の膝　ゆきえ
毒舌になれてる妻の聞かぬふり　瑞枝
とんちんかん屈託のない長寿法　草丘
辛らつな毒舌やさしい顔に似ず　晃男
半日を全学運で店を閉じ　孤呂二
明治百年記念の半どん批判され　鶴丸
足下を新しくして嬉しい日　叮紅
足下は絶壁とゆう景勝地　逓児

地球の半日人間がくたびれる　天痴人
頭と尻尾わからぬ話苦笑する　祥月

川柳ささやま句会　小畠無聖報

ちぐはぐも愛嬌で通る新社員　凡平
手にとって高い値札にまたもどし　みち子
かん高い声に隣はまたはじめ　八陣
ちぐはぐな政治勘弁ならぬデモ　村雨
パン喰いの高さへヒゲが届きかね　案山子
当選の発表待たずに鯛を買い　一聖
高いけどやっぱり送る山の幸　実世
赤札が元の高値で択り分ける　梢
嫁ぐ娘は残り少い日を数え　をさむ
近代化薬屋にピアノでんと据え　たけお
身にしみて残った百円たしかめる　古仙
発表へ米作王は腰伸し　近江

想い出が残る机を指で撫で　永断
頭一つ高い吾が子にせびられる　清香
あんまりなつぎきシャボテン無節操　みのる
発表は賞直送に換えるとさ　初音
残り手のない炭坑に日が高し　可住
適当な肩の高さで甘えられ　無聖
ちぐはぐな母と妻との仲に立ち　泰舟

富柳会（富田林市）　阿部柳太報

欲望が渦がまいてるキャバレーの灯　紅月
愛欲のもつれとにらんだ捜査二課　のぼる
希望なきくらしへやっぱり生きる欲　六龍子
飴でよいと老婆の欲は小さすぎ　摩天郎
でてこない方がよかった忘れもの　花梢
独身の気楽さと云う売れ残り　美代
事情も知らず売残りという汚名　白柳
溜息がついて年末ネェあんた　吉太郎
ショーウインドから美女の溜息聞くダイヤ　柳太

備前川柳社　目賀芳月報

美しい心に月も冴えわたり　正州
恥かしい事があるのに月が冴え　芳月
絵に書いた月が舞台をひきたたせ　伊久野
まん丸な月の心で暮したし　飴ン坊
われ孤独月も一人の道をゆく　万女
終列車出してしみじみ今日の月　博友
宿直がきれいな月に欠伸する　胡風
宿直がきれいな月と書く日記　秋月
明月を見せて背中の子をあやし　芳明
文明が月見の行事忘れさせ　柳子
良い月が出たと精農くわをとり　一声
病む身には月よりの使者きれいすぎ　楽天
見る月をほめて眺めて夜が更ける　幸仙

雲過ぎて二人抜けてる月の宴　ひでよ
灯を消して月見の酒をくみかわし　水仙
平均を超えて寿命のまだつづき　久米雄

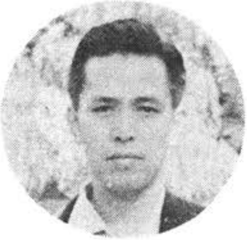
堺・若芽合同句会　吉岡青香報

持ち味も生せず終世のどさまわり　摩天郎
増発をありったけして文化の日　青香
参観日子の間違いに親がてれ　流月
来客はあわて者かと下駄揃え　茂美
万博にのる億万長者へためいきし　春子
ため息を口先だけでなだめられ　千万子
ため息を流石にママは見逃さず　草春
駈け込んで思い思いの終電車　清涼
ホステスが真顔に戻る終電車　筑前
終電車人生模様綾に織り　志寿
金策のつきた終電まぶし過ぎ　宏子
終電が夜明けになった牌の音　好郎
一杯のつもりの腰が終電車　つき子
終電車生きる女の厚化粧　耕人
終電車までは待ってるミシン踏む　花梢
終電車別離れた妻が酔うて居り　輝和
終電もはずれ腹立ち眠うなり　笑痴
ため息の入った唄が歌唱賞　たつお
溜息をつけばぜんそくまたあばれ　天笑
ため息をはさんだ酒が冷えかかり　柳太
忘れてた借金云われてあわて出し　徳子
妻の出てる電話夕べの女らし　遊仙
さりげなく言うた言葉にあわてる目　美代
釣銭も忘れ改札走り抜け　象園
妾宅は何か気になるあわてよう　吉太郎
知恵熱と診たてて老母はあわてない　静馬
慌てないわけ定年がすぐと知れ　一二三
焚火ふと大きくなってきてあわて　白柳

■**どんぐり川柳会**（大阪市）　川村好郎報

無理な戦さと敗けてからわかり　史好
無理をして買えば勿体ないと妻　草春
二級酒の気炎で部下の首を切る　与太郎
二級酒に縁なき奴等脱税し　酔々
酔いたい心二級酒が知っていた　功雄
無理のないプラン三泊もてあまし　千歩
無理出来ぬ齢になったをはがゆがり　生長
りふじんな無理を視線で切り返し　痴亭
焼酎を二級酒にして仲直り　鬼遊
二級酒に財希の底を払い出し　弥生
二級酒を飲んでも同じ芸を出し　吸江
無理矢理に子に起こされて朝になる　秋水
無理云われうれしがってるうちが花　真砂
無理乗りも皆勤のための労働者　重夫
エリートコース無理と知りつつママ選び　比呂路

雅号ぶっちゃけばなし（63）



りゅうこうし　にしだ
西田柳宏子

清水白柳さんが白柳子と名乗って居られた当時に、川柳のイロハから教えて頂き、初めのうちは「ひろし」と名前をそのまま呼名している内に雅号を考えてみてはとすすめられ白柳子さんの柳子を頂き間に名前の宏を入れて「柳宏子」が出来上りました。最初のうち会社の社内報に川柳を載せた時柳宏子（ヤナギヒロコ）と読まれて印刷されて苦笑したことも懐しい思いです。照れ臭いような気持の雅号も馴れるに従い、流行子に通ずる語呂に自惚れてもみたり、いい雅号だと白柳さんに感謝していますが名前負けか一向に句が上達しないのを申し訳けなく思っています。

自惚れもちょっぴり持っている雅号　（会社員）

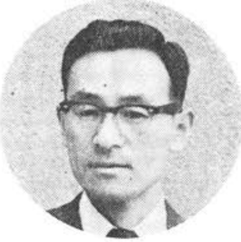
黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社　西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八

雅号ぶっちゃけばなし　(64)

よう すけ



かわい

河井庸庸

結論から言うと雅号について取りたてて言うことは何もない。親にもらった名が洋右、付けた意図はほかにない珍らしい名ということらしいが、今のところ松岡洋右（元外相）と同職にひとりいる。生まれて二十有余年、洋右できたが、姓名判断によると好ましくないというので昭和二十九年庸佑と改名した。昭和三十年、川柳に興味を持ち義父（不二田一三夫）のすすめもあり川柳をはじめた。さて雅号は、名なしでは困るのでそのまま庸佑とした。作句をはじめて十数年、少しはましな句ができるようになれば、雅号らしい気のきいたものに変えようと思って、努力しているがまだその機を得ず、このままずっといきそうである。

教職員（三十九歳）

二級酒に小言も云えず妻の酌　喜風
たかが二級もうテニオハの云えぬ酔　県吉郎
無理をしているなとみの虫が見てる　薫風
数のある方がと二級酒くくらせる　白柳
優勝楯惜敗の過去をもう忘れ　好郎

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

なけなしが見栄はっている恋の意地　泉睦
なけなしを孫の笑顔がはたかせる　立児
なけなしの金を貸す気の友があり　扇里
スリルある宇宙生活夢でなし　幸子
へましても笑っておさまる新家庭　茂児
本番であがり手品の種がばれ　瓢太
今日こそは天を（とりたい）なけなしの智恵　信代
川下りポスターほどにないスリル　好郎

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

拗ねたのが嘘のような児の寝顔　桂馬
世をすねた手に盆栽が派手に咲き　吐来
拗ねてみて変らぬ愛をたしかめる　立女
ささやかな優越靴をみがかせる　紀水
退院の日の靴音が笑ってる　酔々
貞操を盾に女の目が拗ねる　一治
拗ねているらし妻の黙否権　いわを
身勝手が拗ねた子供をなお叱り　一峯
靴みがく顔もほころぶデートの日　俊一
庭の隅月給運んだ靴あわれ　五条
赤い靴ぬいで米とぐ共稼ぎ　仲二
癒え近し再起の靴を手入れする　広和
見てくれることを意識して靴えらび　伸二
宮仕え水虫も泣く靴の中　竹西
惚れさせてすねてせしめるあざやかさ　輝楽
炎天下泥にまみれて今日を生き　一光
古靴に苦い初恋想い出し　正弘
靴音も揃い二人はまだ歩き　好郎

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

いきさつをくどくどと女なり　立児
手鏡の衿の白髪が目立ちかけ　泉睦
免許取りたてバックミラーも見（てられず）　幸子
いきさつは何れ判ると沈黙し　瓢々
あてはずれ捨てた馬券を踏みつける　星斗
離婚したいきさつ知らぬ振りで聞き　好郎

ウイロー社（ハワイ）

戦地便り読んで母親胸を撫で　ヱス子
家庭医書妻も読み出す更年期　紅渓
老妻が寝そべって読む主婦の友　あき坊
読みとれぬ相手の心になやまされ　紅茶
性の本一番鶏まで読みつづけ　暁舟
顔色を読んで本心遠く居り　内海
本心と別な表情読まれたり　快夢起
兎も角も待たせてくれと上り込み　カロ女
晩婚の子の成長へ古稀近し　拝山
子の使い夕餉の母をいらだたせ　浮草
信じてる友の時間に来ぬ不安　あき坊
勘違いトンチンカンに待ち合せ　泉水
敬遠をされて別間に待たされる　峯園
待ちますと泣いて誓って他人へ嫁き　柳葉
吉報を待てとしっかり靴の紐　魔花麗

オーエスケー川柳会　大坂形水報

引けば開くドアと知らず力み押す　美露
ノックする三ツの音で父と知る　博
休日に慣れぬ手つきの台所　東勝
休日は寝ようとしても眠られず　重則

煌々と電気の下で爪を切る　亜成
休日へ夫婦の思惑くいちがい　有一
先生の着流しに会う日曜日　功
休日は二階も未だ降りて来ず　一扇
連休のプラン半年先のこと　形水
身じまいをただすドアの中静か　入仙

駒つなぎ川柳会　南柳報

金バッジ今日の晴衣に輝きて　群恵
金バッジに似合わぬ顔がそり返り　悟郎
ハイキング疲れ忘れる湧き清水　ひとし
古い縄集めて冬の灰つくる　みよ
富士登山まだかまだかの八合目　南柳
お守りのように愛児の写真持ち　潔
ハネムーンで買った守りが持ち始め　柳信
腹巻きへ入れてお守り角が折れ　白柳

焼栗が匂う参道曲り角　眉水
水かけ地蔵しぶき戻ってくるばかり　育園
一泊の旅と思えぬ程みやげ　花梢
荷物にはなるが土産の義理を買い　小路
爆弾の種は土産の箱の中　詳恵

七面川柳会（和歌山）　垂井葵水報

逃げる子へ腹巻やっと追いすがり　智水庵
口癖が夢の中までついてくる　みどり
恋しい日口癖やっと真似てみる　みさを
腹巻にある充実を確める　葵水
口癖と知っていながら腹がたち　次章
同窓会師の口癖を皆でまね　淳子
口癖と知りつつ乗ったママの口　公作
腹巻をスネまで下げた探し物　三幸
腹巻と雪駄と小さいピストルと　白柳

川柳たけはら（竹原市）　山内静水報

お客様麦茶でたっぷり喋って行き　洋子
夏バテのひまわり頭の下がる昼　浩
もやしっ子教育ママに育てられ　法子
お祭りの花火ポンポン父は病み　浄美
つまづきの人生母がつきあってくれ　孚彦
以上学生
虚栄の徒あぁ売り食いをはばからず　菁居
台風へ風鈴狂ったように鳴り　そのみ
この平和海面の月を乱すまい　美佐雄
百円の予算綿菓子買うただけ　貞子
せめてもの願い綺麗に老けたくて　操子
手術室冷たい冷たい息を吸う　笹井
しかし小さいな夢だなとも思い　文晴
飛込んだ店から俄雨眺め　酔舟

雅号ぶっちゃけばなし（65）

くんぷう　きったか
橘高薫風

姓の橘高に薫と父親が名付けたのと同様、名の薫に「風の子」を付けて、薫風子と雅号を決めたのも最も平凡な思いからで、今にして自分の雅号として名乗るのなら更に好もしい名もあろうにと思わぬでもない。

当時、明和病院川柳青蛙会の指導をされていた故水谷鮎美氏が若々しい良い名前だと葉書で云って下さったことを覚えている。後、川柳雑誌の編集室で路郎先生は、薫風とするのが良い。葭乃先生は、薫風子の方がよろしいと仰言った。柳歴十年にして子をとった。薫風は案外古臭い雅号だが、伝統を守る私の心意気だと、今では思っている。

旅館業（四十二歳）

寒中お見舞い
申しあげます

大阪逓信病院川柳会

会長　田中十方
市場没食子
若林草右
牛田晴夫
水谷竹荘
小沢史葉
幹事　桝本蕗児
井上露芳
西口竹志
和田甘子
幹事　森下愛論
会計　橋本幸男
客人　半田夏生
佐藤甘草
福田秋風郎

雅号ぶっちゃけばなし（66）

清水白柳（しみず はくりゅう）

その昔、大正十二年の冬ごろ、本名をもじって「喜芳」で投句していたのだが、仲間に川柳作句をすすめたところ、川柳らしい雅号に変えたらどうかということで十人程が皆変えた。北国のことだから雪柳か柳雪にしようかと思ったが、雪は白いから白柳でどうだと相談したら、その下に子をつけろということで白柳子にした。当時は雅号に子をつけるのが流行した。昭和三十三年までそのままで来たのだが、雅号がいけないのか何事もうまくいかないので、雅号を変えようかと思い路郎先生に相談した処、折角馴染んで来た雅号だから、せめて子だけを取って辛抱しろということだった。それからでももう十年になる。

建築業（六十四歳）

ばけものと思う真昼のアイシャード　政己
車庫のない広さ今更くやしがり　大陸
過去帳の重さ平和とは別に　静火
叱られて捨てる小犬もともに駆け　英詩
寝まき着てから用事思い出し　凡女
職場から見るビヤガーデンの灯がにくい　春昇
使われる主人工場で見てしまい　扇水
日本はよい国日本しか知らず　蘭幸
真剣な瞳がこわい日もあって　笑子
青年の日に熟れぬもの多く朝　和尾
大ジョッキ無理して恋人と一諸　清
薬草の露にぬれつつ谷探す　澄
白夜続く北海に死の寝息　康徳
共稼ぎ今日のビールは妻おごり　清太郎
夏の女みんな造花を想わせる　静波

人知れず準備に追われ今日もふけ　松緑
忠告と言う横槍で突いてくる　のり子
赤ちゃんの耳朶ほどのよき日なり　不朽
怒ってるその顔鏡でよくごらん　一路
問い詰めてといつめて可哀想になり　不動
キャンパスに叩きつけたい花の色　雅鳳
さりげなくとったポーズに過去の影　芳則
応分の床に糊気の敷布あり　大石庵
甘んじているわけでない子の寝顔　清海
働ける身体働らくとこがあり　房子
夫婦で聴いてもどったいい講話　静水
働けば汗はたらける幸おもう　紫苑荘
朝まだき熱海の屋根はまだ眠り　甦光

ふじかげ短詩睦会　藤本礎山報

手をたたくだけへ飼われた鯉が寄り　実

ハイキング手ですくう水うまかった　昌代
父の手の無骨さ安心して頼り　良枝
荒れた手へ母コーチゾン塗ってくれ　美弥
演出を見るよう党主手を握り　敬子
母が居て手を上げたのへ指命され　二朗
勉強はさぼりテレビに汗にぎり　千代子
叩く手へ寄る習性の鯉哀れ　由起子
帰郷した姉の児手から手へ渡り　清子
姉の手のダイヤは嫁に行く準備　久美
人形を生きてるように動かす手　光子
手を膝に親父の叱言聞いていず　喬
ねだる手に父なにほども握らせず　佐知子
背なに手を置いて落胆慰める　香絵
手に汗がふきだす成績発表日　恵子
母の手の節が苦惨をものがたり　きち
祖母に似た人に手を貸す山の寺　朱実
もう手にはおえないと母嬉しがり　和宏

以上小中学分

コンテスト立っているさえ気を使い　政子
差し延べた手を邪推から払われる　透風
もう一つ郷の土産へ手が欲しい　貴子
その辺で手を打っとけと合図する　一稔
あの人の手がと驚く特売場　梅野
手相見が自分の手相見てもらい　武志
手にとった生地を女はみんな好き　真利子
六十二まだ遊んではおれない手　千代子
愛情を確かめてみる手を握り　清久
毛糸編む手も休めずに道教え　千鶴子
手を握り合うて歩ける歳になり　久喜
街角へ来て明日逢える手を握る　十三子
出世する手だと言うのは信じとく　利子

エプロンに紫蘇の手隠し客へ出る　葉舟
美しい嫁の手姑が自慢する　喜久子
あざやかな茶筌に夫婦静かなり　千重
安全を預ける片手の白い杖　忠志
丸木橋手を貸してから湧いた倖　一代
緊張が過ぎて習字の手がふるえ　貴恵
可愛い手いたずらするとは思われず　佳女
握り合う手と手へ熱い血がかよい　吉春
かるく打つ母の手信じて児は眠り　鎮也
就職へ手のかかるころ恋しがり　泰嗣
手に汗を握って産ぶ声待つ初児　征山
もみ手してもみ手してして小商人　和久
法律書の手あか油断のならぬ人　勝久
宝石は知らぬ手水晶米作る　礎山

城北明朗会　川口弘生報

高座から降りれば恐い顔になり　鉄舟
花道へ声かけられる文化財　多幸
交通のマヒが楽屋を慌てさせ　本蔭棒
おどろいたパンパカパーンで議員出来　漁人
国宝の至芸にお客気をのまれ　茶々坊
舞台裏で流す涙を客しらず　弘生
プロレスは御恩返しに首を絞め　生仏
歌舞伎劇男同志で恋をする　聖川
俳優は年を気にせぬ娘役　芳
政治界百年変える芸能人　冨士
芸能人政治にチョッカイかけてみる　浊水
人波の一人が見つけた成駒屋　一乃字
玉の汗飛んで笑わす万才師　馬頭
春団治羽織の裏も春の色　光武亭
芸界も親の光が照る世界　ふさ

蛙の子は蛙芸才あらそえず　ムラエ
盲目の耳楽しますず万才師　キサノ
仕掛花火もったいないと御老人　繁子
腹が立ちお経を読んで気を直し　久子
ウラ盆に先祖が一族招き寄せ　一登
スカートが長い短かで母娘もめ　柳生
腹が出て天橋立たって見る　行有
ドートンの橋にネオンの灯がきれい　セツ
タレントも初の議場でチトあがり　一休

葦川柳会（島療）　岡崎祥月報

病窓の雲がきれいな回復期　鳳人
黒雲に乗って大蛇の出た神話　巡歩
車窓から富士をかくした雲にくし　舞吉
宍道湖の夕焼け雲が俺を誘う　天痴人
白黒とそれぞれ雲にある個性　祥月

雅号ぶっちゃけばなし（67）

ふじた　いさを

不二田一三夫

ボクの場合、雅号ではなく筆名である。約四十年前に、久良岐選でこの筆名をつかったことがある。—映画雑誌時代には本名の藤田怡佐夫の怡を、治や恰に誤植されるので〃藤田いさを〃にした。—その後、標語をやりだして、一、二、三位に入選しないと、賞金がすくないのでそれにあやかるように、またこの筆名を使いだしたのである。カップや楯のペナントが〃不二田一三夫〃なら、裏がえしになっていても〃不二田一三夫〃と読めるし、それに通信物も局名だけで届くし、ゼニ儲けもしてくれる。しかし本名のほうは税金だけ取りに来やあがるから大きらい。もし新聞に本名が出るようなことがあれば、ロクなことがないにきまっている。

漫才作家（かぞえで昭和、満で明治生まれ）

色紙短冊
書画用品
大阪戎ばし筋
丹青堂
電南 七二一・七二二

・募　集・

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「セールス」　光好陽子選
「背　広」　長谷川紫光選
「　肌　」　長谷川三司選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「　姿　」　三井酔夢選
「沈　黙」　田村藤波選
「団　地」　小西雄々選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価　百四十円（送料六円）
半年分　八百七十円（送料共）
一年分　千六百八十円（送料負担）
昭和四十四年一月二十五日印刷
昭和四十四年二月一日発行
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一－三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

寒中お見舞

浜田久米雄

709―02 備前川柳社
岡山県和気郡吉永町福満

玉造川柳会

時　二月十日月午後六時
題　寒むがり・前進・横
所　玉造交差点南一〇〇米
　　大阪信用金庫

堺・若芽合同句会

時　二月十三日（午後六時）
題　なべ・線・押す
所　堺市九間町山ノ口筋
　　八木摩天郎宅

南大阪川柳会

時　二月二十日　午後六時
題　若手・対話・困る・トースター
所　生野区北生野町一ノ五
　　国分町東三〇〇米　乗願寺

本社二月句会

日時　二月六日（木）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
　　阿倍野区松崎町二丁目
　　電話622・1275番
兼題
　柳話　橘高薫風選
　「大学生」　児島与呂志選
　「裏方」　傍島静馬選
　「ガラス」　阿万万的選
　「化ける」　戸田古方選
席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　二百円
★投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川　柳　塔　社
電話大阪(271)3985番

3月の兼題　「インテリ」「抜けがけ」「神　経」「別　室」

〈朝鮮人参〉の効用

二千年以上の伝統をもつ朝鮮人参が
この宇宙時代に
すぐれた薬として欧米でも
再認識されています
〈ヒヤク〉は
この朝鮮人参の
有効成分をそっくり
カプセルにつめた
現代人の薬です

- ●体力を充実させたい方
- ●疲れがとれにくい方
- ●貧血・冷え症の方
- ●老化現象の方
- ●胃腸の弱い方

朝鮮人参エキス製剤
ヒヤク
45カプセル・90カプセル・300カプセル
（カプセル）

山之内
山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2－5

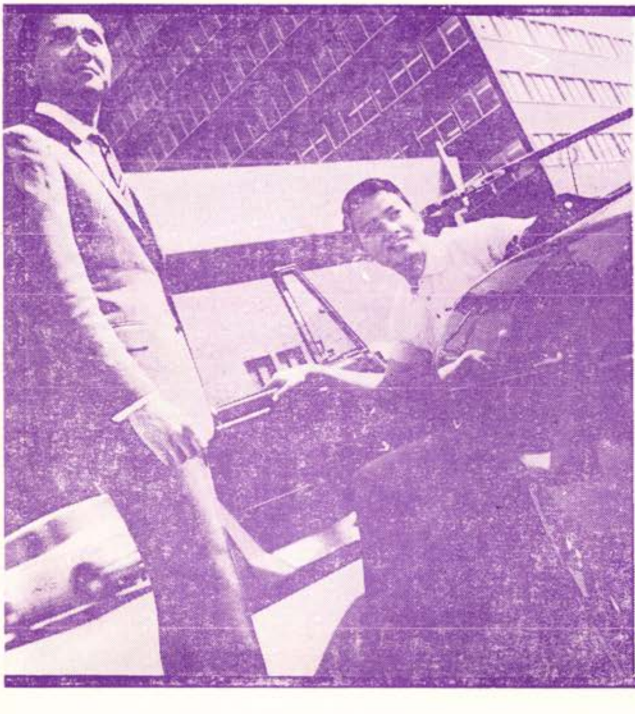
・2DK・

★新年号は所によって一月四日に着いたところがあったそうで、かと思うと年内の二十九日に着いたところもあった。発送の日に形水氏が車を貸してくださったので大助かりだった。毎月ハイヤーさがしに泣く薬子さんの顔も明るい。

★雅号特集は本社役員も出場せよという要望だったので、思いきってガン首をならべさせてもらった。一度出た人や締切りにまに合わなかった方々はまたの日にした。ちょっと読みにくい組みになったが、ご寛容のほどを。

☆相変らず追われっぱなしである。よっぽどバカなのかカゼ一つひかない。

—不二田一三夫



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。
その秘密は、東レテトロン®—激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。

東レ テトロン（ポリエステル100%）
オルテロン
スーツ・スラックス
Toray 東洋レーヨン株式会社

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年一月二十五日 印刷
昭和四十四年二月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔 二月号

定価 百四十円 （送料 六円）

3,000円以下で買えます―充電式！
CADNICA®

SANYO
三洋電機株式会社

●SV−1000 ¥2,980
サンヨーカドニカカミソリ エック

料理も電話も 551 ここがいちばん
TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子
豚饅 蓬莱 焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天埠頭支店／中之島サン・ストアー